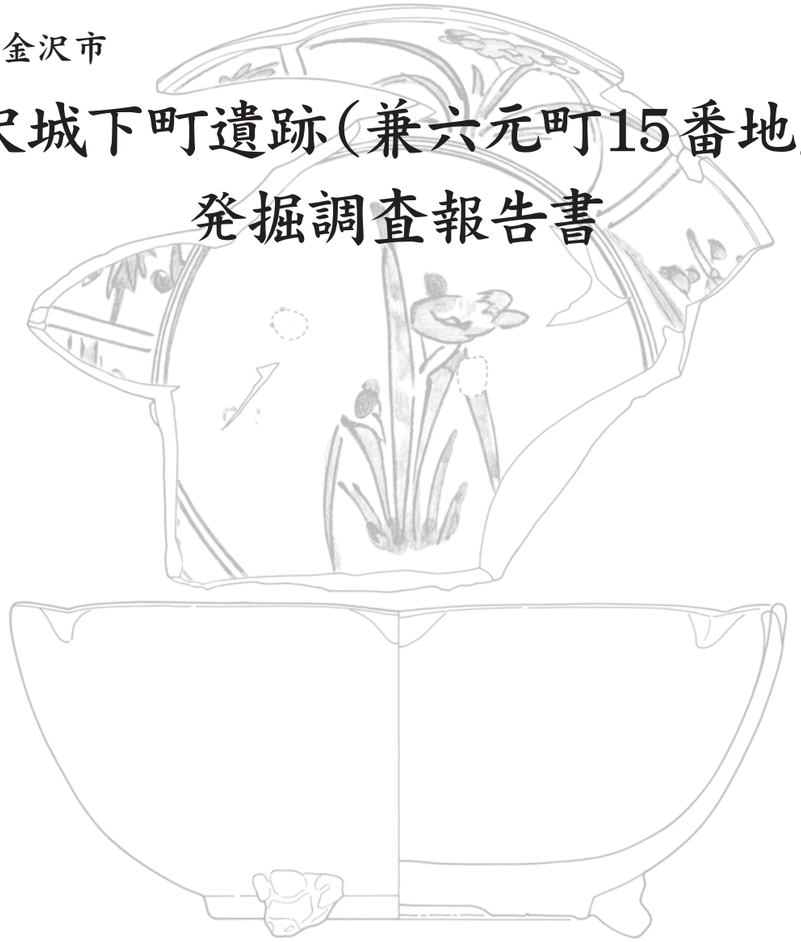
金沢市文化財紀要 327

石川県 金沢市

金沢城下町遺跡（兼六元町15番地点）発掘調査報告書



令和２年３月
（２０２０年）

金　　沢　　市
（金沢市埋蔵文化財センター）

金沢市文化財紀要三二七　金沢城下町遺跡（兼六元町15番地点）　2020　金沢市

石川県 金沢市

金沢城下町遺跡（兼六元町15番地点）
発掘調査報告書

令和２年３月
（２０２０年）

金　　沢　　市
（金沢市埋蔵文化財センター）

例　言

1．本書は、石川県金沢市兼六元町 19 番１、20 番、21 番１、21 番３、22 番１に所在する金沢城下町遺跡（兼六元町 15 番地点）の発掘調査報告書である。

2．金沢城下町遺跡(兼六元町15番地点)は、シオタニ株式会社による有料老人ホーム新築工事に伴い、平成 30 年度に金沢市が発掘調査を実施したものである。

3．発掘調査の期間、面積は次のとおりである。

　期間：平成 30 年（2018）７月 13 日～平成 30 年９月 27 日　調査面積：202㎡

4．発掘調査は、金沢市埋蔵文化財調査委員会（委員長 小嶋芳孝氏、委員　横山方子氏、米沢義光氏、藤田邦雄氏）の指導の下で、谷口宗治（文化財保護課担当課長補佐）が担当した。

5．本書の編集･執筆は、新出敬子（文化財保護課主査）、遺物写真撮影は庄田知充（文化財保護課主査）が担当した。

6．本発掘調査・整理作業にあたりシオタニ株式会社から多大な協力を賜った。記して感謝の意を申し上げる。

7．屋内整理および製図は、次の方々に協力していただいた（50 音順、敬称略）。

　井川明子、蟹ヤエ子、谷森真利、寺西悦子、土橋裕美、供田奈津子、畑尾ゆか

8．本書の遺構図の指示は以下のとおりである。

(1) 遺構図の方位は全て座標北である。座標は世界測地系に基づく国土座標第Ⅶ系（測地成果 2000）に準拠している。

(2) 各図の縮尺については原則としてスケールを付し、表題末にも示している。

(3) 土層の色調は小山正忠・竹原秀雄 2006『新版標準土色帳』（日本色研究事業（株））による。

(4) 遺構図の水平基準は海抜高で、単位はメートル（m）で記した。

(5) 遺構名は、石垣、石列の他、SK：土坑、SD：溝などの略号を用いた。

9．本書の遺物の記述には、下記の分類編年案による時期設定や分類を引用した。

土師器皿の記述には滝川重徳氏による分類（滝川 2002）を利用した。陶磁器の年代観のうち、堀内秀樹氏等による陶磁器編年案（堀内・成瀬 2001）を引用した箇所については東大編年と略称した。瀬戸陶磁器については藤澤良祐氏による案（藤澤 1998）を引用した。越前陶器については木村孝一郎氏による案（木村 2004）を引用した。

10. 本書に収録した遺物は、全て金沢市教育委員会が一括して保管している。

金沢城下町遺跡（兼六元町 15 番地点）発掘調査報告書　目次

第１章　調査に至る経緯と調査の概要 …… 1

第２章　遺跡の位置と環境 …… 3

第３章　遺構と遺物 …… 7

第４章　総　括 …… 22

測量図版

写真図版

凡　例

遺物について

1．遺物図の縮尺は、次のとおりである。図版にはスケールを付し、表題末にも示している。
掲載方法は遺構ごととしたが、金属製品と土人形は少量のため一括して種類ごとに掲載してある。

　１／３　陶磁器、土器、石製品の一部、金属製品、銭貨、土人形等土製品、瓦

　１／６　石製品の一部

2．遺物実測図中の記号は次のとおりである。

青磁釉・赤色顔料　　釉薬境

胎土目・砂目　　灯芯油痕

遺物観察表について

1．「番号」欄には、図版ごとに振り直した番号をつけている。

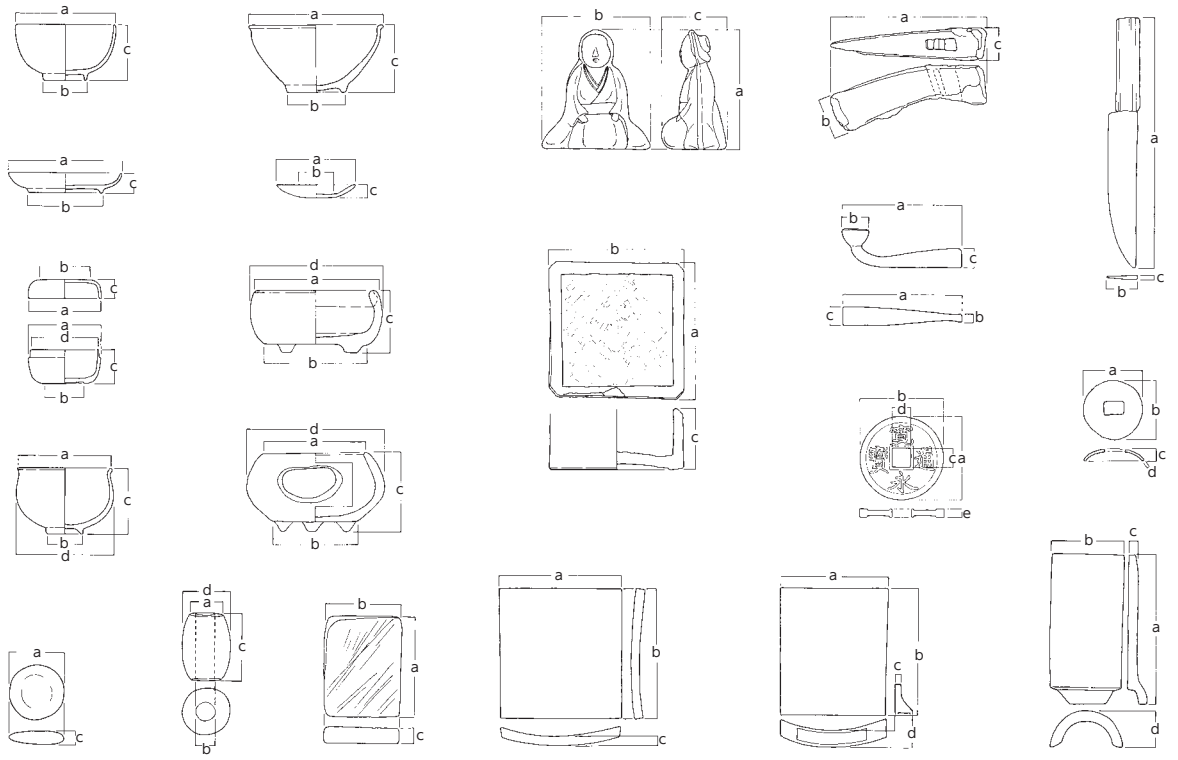
2．「器種」欄には、磁器・陶器・土器などの材質も併記している。

3．「法量」は、a・b・c・dの４欄に分けて記入した。計測部位は凡例図のとおりである。口径は最大径、底径は接地部径である。計測値のうち（ ）数字について、陶磁器では復元数値に不安の残るもの、その他の遺物では現存長を示すのに用いた。

4．「遺存」欄には、径を復元する際に利用した部位と遺存度を記した。

5．「産地」欄には、器形や胎土等をもとに新出が推定した産地を記してある。

6．「実測番号」欄は、実測者の通し番号で、遺物・実測図に付している番号と一致する。



第１章　調査に至る経緯と調査の概要

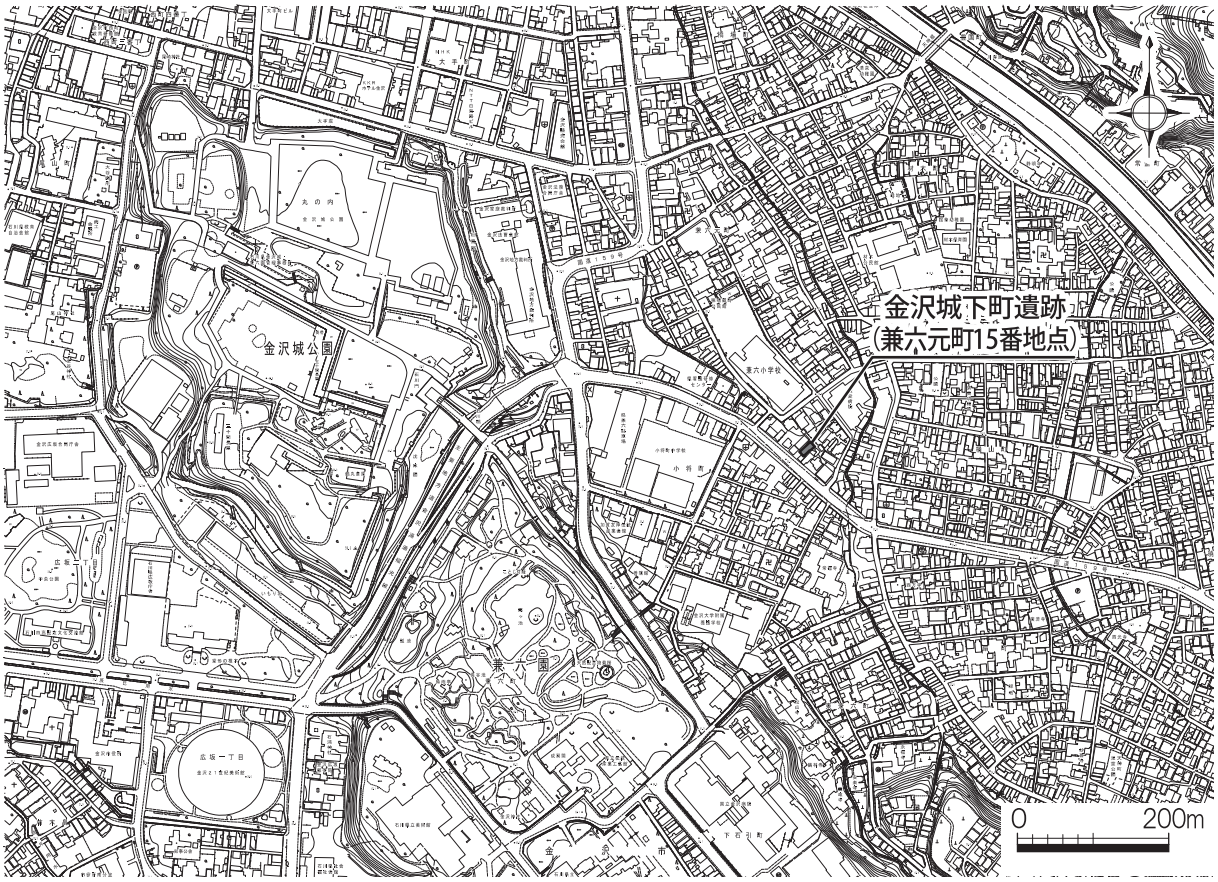
第１節　調査に至る経緯と経過

金沢城下町遺跡（兼六元町 15 番地点）は、平成 29 年度に計画されたシオタニ株式会社による有料老人ホーム新築工事に伴い発掘調査を行った遺跡である。

平成 29 年（2017）、シオタニ株式会社から金沢市兼六元町地内で有料老人ホーム新築工事を行うにあたり埋蔵文化財確認調査依頼が文化財保護課に提出された。これを受けて同年 11 月 17 日に試掘調査を実施したところ、施工予定地において江戸時代に属する遺跡が確認された。当該範囲は金沢城下町遺跡の一角にあたることから、遺跡名は「金沢城下町遺跡（兼六元町 15 番地点）」とした。

これを受け、平成 30 年 (2018) 6 月 8 日にシオタニ株式会社と金沢市とで委託契約を交わし、発掘調査に着手することになった。発掘調査範囲は事業予定地のうち、工事によって遺構が破壊する範囲、計 202㎡が対象となった。調査期間は平成 30 年 7 月 13 日～同年 9 月 27 日に実施した。

出土遺物等の屋内整理作業は令和元年度に行い、発掘調査報告書を編集・刊行した。



第１図　金沢城下町遺跡（兼六元町１５番地点）の位置〔S=1/10,000〕

第２節　発掘調査の概要

有料老人ホーム建設予定地は浅野川によって形成された高低差のある河岸段丘上で、調査対象となったのは遺跡が確認された段丘の高い位置に建設が予定された駐車場部分と段丘の崖で破壊されるヵ所、202㎡とした。

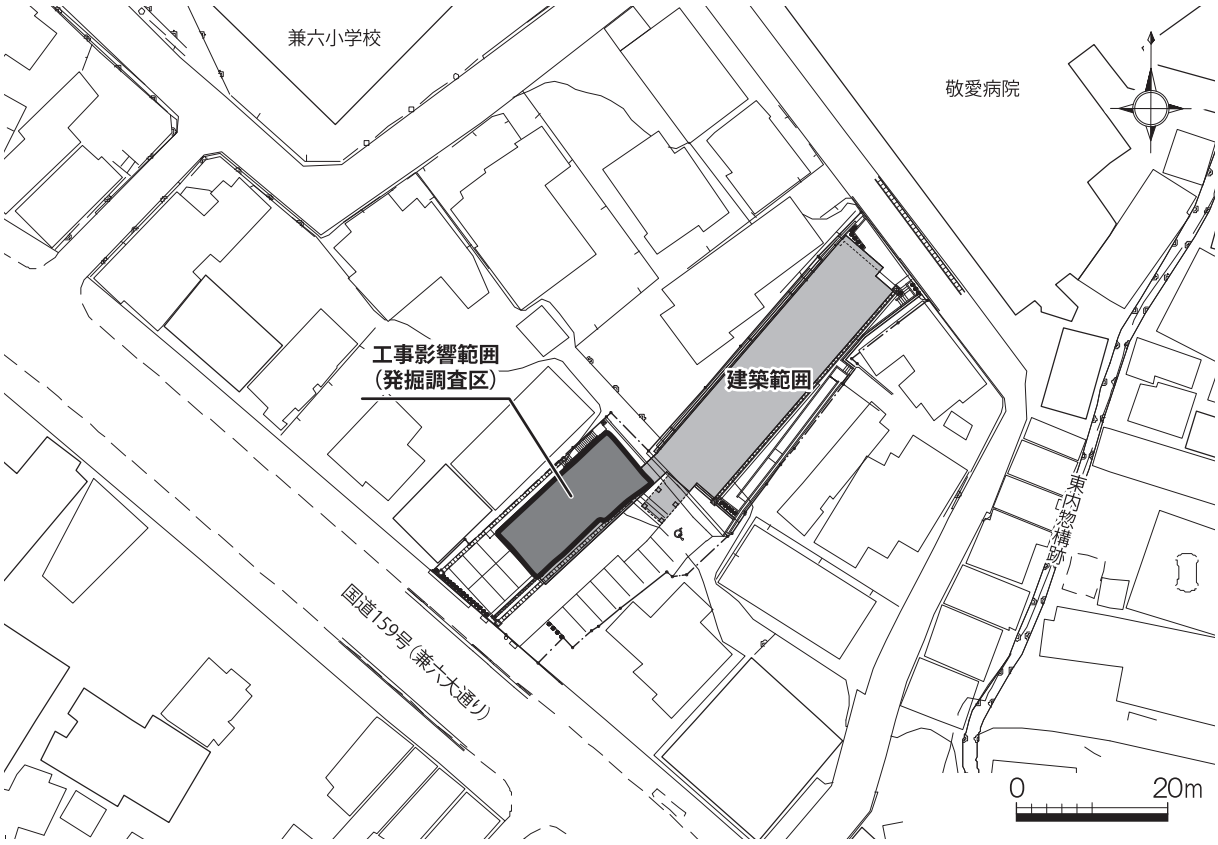
調査においては世界測地系 2011 に基づいた公共座標（MK-WE 座標系第Ⅶ系）に準拠して調査区内に 10 ｍメッシュグリッド杭を設定した。グリッド杭に西からＡ～Ｄ、北から１～６の順で杭番号を設定して座標値の基準としている。遺物の取り上げや遺構の位置については、調査区が狭いことから地表面からの深さで行っている。

基本層序は現況のＧＬから約 70cm 程度が近世包含層であるが、大きく撹乱を受けていた。ＧＬから 80cmでは石垣や石製構造物、土坑などが確認されたが、調査区全体が近代の撹乱を受け破壊されていた。ＧＬ 100cmまで掘削すると、敷石や溝などが確認され、ＧＬ 120cmに達すると、これまで暗褐色を呈し遺物を含んでいたやや粘質のある土砂から、やや明るい褐色の砂礫を呈した遺物をほぼ含まない土砂へと変化した。

【発掘日誌抄】

平成 30 年（2018 年）

7月 13日　調査区範囲杭設置。
7月 17日　表土掘削（調査区西側半分。2日間）。
7月 19日　屋外作業員作業開始。包含層掘削。
7月 24日　石組み検出
7月 30日　整地層掘削。
8月　6日　表土掘削（調査区東側半分。1日間）。
8月　7日　東側包含層掘削。石組み検出。
8月　9日　西側遺構検出。掘削。
8月 21日　遺構図作成。
8月 27日　石垣1検出。
8月 30日　石列1検出。
9月　5日　石垣等立面図作成。
9月 11日　土坑等掘削。
9月 20日　遺構図作成。測量撮影準備。
9月 21日　測量図化用写真撮影
9月 27日　撤収作業。現地作業終了。



第２図　発掘調査区位置図〔S=1/1,000〕

第２章　遺跡の位置と環境

第１節　遺跡の位置と地理的環境

金沢城下町遺跡は、金沢城を中心とし惣構跡に囲繞された約 200ha の範囲に広がる近世に属する遺跡である。

石川県は日本海に面した県で、東は富山県、西は福井県、南は岐阜県と接している。旧国名では北の能登国と南の加賀国からなる、南北に細長い県である。

金沢市は旧加賀国の北部、石川県の中央やや南に位置する、面積 468.64㎢、人口約 46 万 6 千人を抱える石川県の県都である。江戸時代においては加賀藩前田氏の居城である金沢城の城下町として繁栄し、太平洋戦争時の戦災を免れた町並みは現在でも当時の姿をうかがわせている。旧市街地が古い都市構造を残すのに対し、ＪＲ金沢駅以北の扇状地においては、かつての水田や耕作地帯から区画整理事業による新興住宅地に姿を変え、また県庁移転や北陸新幹線開通などの影響によってビジネス街が発展するなど、旧市街地とは対照的な姿をみせている。

第３図　石川県及び金沢市の位置

金沢市の地形は、東方は森本（もりもと）丘陵および加越（かえつ）山地で、そこから北西方向に平野部が広がり、北東から南西方向に伸びる海岸線の日本海に面している。平野部は南東に連なる奈良岳（ならだけ）・奥三方（おくさんぼう）・大門山（だいもんざん）など海抜 1,500 m を超える山地に源を発して西流する浅野川（あさのがわ）と犀川（さいがわ）によって三分され、浅野川以北が北部平野、浅野川と犀川の間が西部平野、犀川以南が南部平野である。北部平野は浅野川や森下（もりもと）川などにより形成された沖積平野で、粘性の強い地盤である。南部平野は白山に源を発する石川県最大の河川、手取（てどり）川が形成した扇状地の北辺にあたり、砂質の強いシルト層の地質である。西部平野は犀川・浅野川の沖積地で、北部平野と南部平野の地質が混在している。

城下町及び旧市街は犀川と浅野川が最接近する付近に形成された小立野段丘一帯に立地しており、本遺跡はその東側の下位段丘上に位置する。加賀藩三代藩主前田利常の頃に大きく整備された金沢城とその城下町は、もと一向宗の拠点の一つであった金沢御堂（尾山御坊）とその寺内町につくられたもので、17 世紀前半にはほぼその姿を整えている。犀川・浅野川と河岸段丘より成る地形を巧みに利用したものとなっており、段丘突端に築かれた金沢城を中心に、段丘崖部にはその高低差を利用して「惣構」と称される土居・堀で形成された遺構が、旧市街地を取り囲むように内、外２重に巡らされている。金沢市は、旧市街地の地下に存在する近世城下町の遺跡を埋蔵文化財包蔵地として一体的に保護するため、外惣構内側の範囲及び金沢城東側の家臣団屋敷地について平成 23 年（2011）に「金沢城下町遺跡」として周知化した。この範囲は国重要文化的景観「金沢の文化的景観　城下町の伝統と文化」の範囲に一致している。

本遺跡は金沢市の中心部、兼六元町地内にある。金沢城の東約 300m、浅野川の西約 400m の距離で、ほぼ両者の中間に位置する。調査地周辺は、金沢城をはじめ、兼六園、金沢 21 世紀美術館などの観光スポットが集結し賑わいをみせている。

第２節　周辺の遺跡と歴史的環境

平成23年度に周知化された金沢城下町遺跡の範囲は、先述したとおり惣構の内部と金沢城東側の家臣団屋敷地である。周知を図るにあたって、この範囲に属する既存周知の遺跡については、中世以前のものについては変更せず、近世を主とする既存のものは『金沢城下町遺跡（【既存周知の遺跡名】地区)』、以降新発見の遺跡については『金沢城下町遺跡（【遺跡の存在する街区】地点)』と呼称を統一することとしている。以降、「地区」及び「地点」呼称のものは金沢城下町遺跡であることを示すものとしてご理解いただきたい。

周辺地域の最古の生活痕としては、金沢城石川門前土橋（a）および車橋調査区（b）の盛土層から旧石器時代後期の剥片石器がみつかっている。縄文時代の代表的な遺跡としては、縄文時代前期末～後期にかけての集落跡である笠舞Ａ遺跡、晩期の鹿角製釣針が出土した笠舞Ｂ遺跡、犀川の第一段丘面に形成された後・晩期の集落跡と想定される犀川鉄橋遺跡などがある。

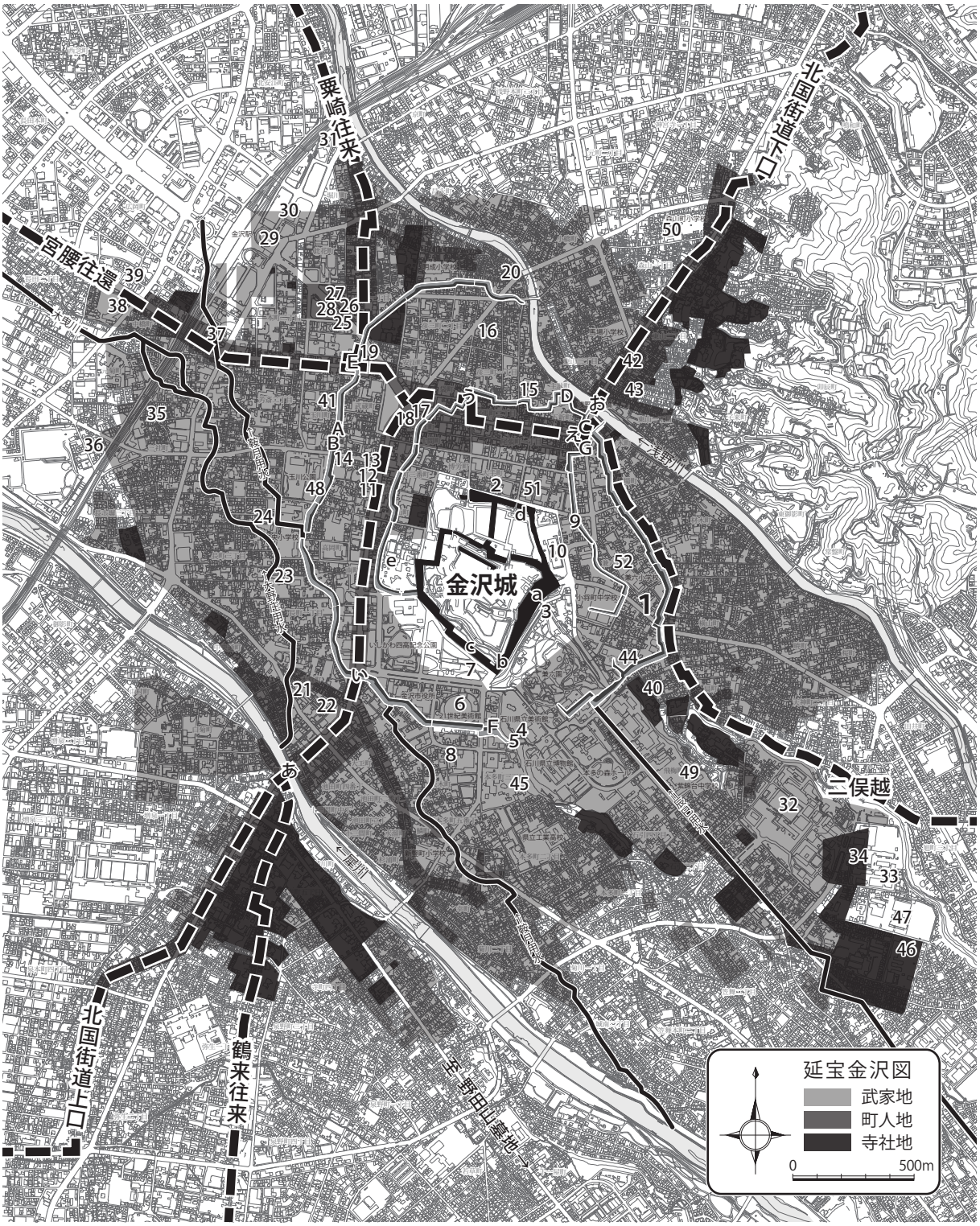
弥生時代の遺跡としては、前田氏（長種系）屋敷跡地区（2）がある。弥生時代後期後半から終末期の墳丘墓が検出され､中心部に１基､その周りに４基の木棺が検出されている。本町一丁目遺跡（25～28）からは終末期の集落跡が検出された。広坂遺跡（6･7)､高岡町地点（13･14)､醒ヶ井町遺跡（39）でも弥生時代後期～古墳時代前期の遺構がみつかっているほか、当遺跡においても古墳時代前期に属する溝が検出されている。古墳時代末の遺跡としては、高岡町地点があり、日本に伝来しなかったとされる半瓦当が出土したほか、奈良二彩や銅製帯金具が出土するなど特異な性格をもつ遺跡である。

奈良・平安時代では、金沢21世紀美術館建設に伴い発掘調査を実施した広坂遺跡で藤原宮式軒平瓦と平城宮式軒瓦が出土し、古代寺院の存在が想定されている。前田氏（長種系）屋敷跡地区からは土坑や小穴が検出され、当該期の土器が出土している。

中世には高岡町地点で薬研堀が検出されたほか、彦三町一丁目15番地点（16）でも溝と遺物が報告されている。戦国時代になると現在の金沢城の場所に金沢御堂が建てられ周囲には寺内町があったと考えられているが、遺構が検出されていないため詳細は不明である。

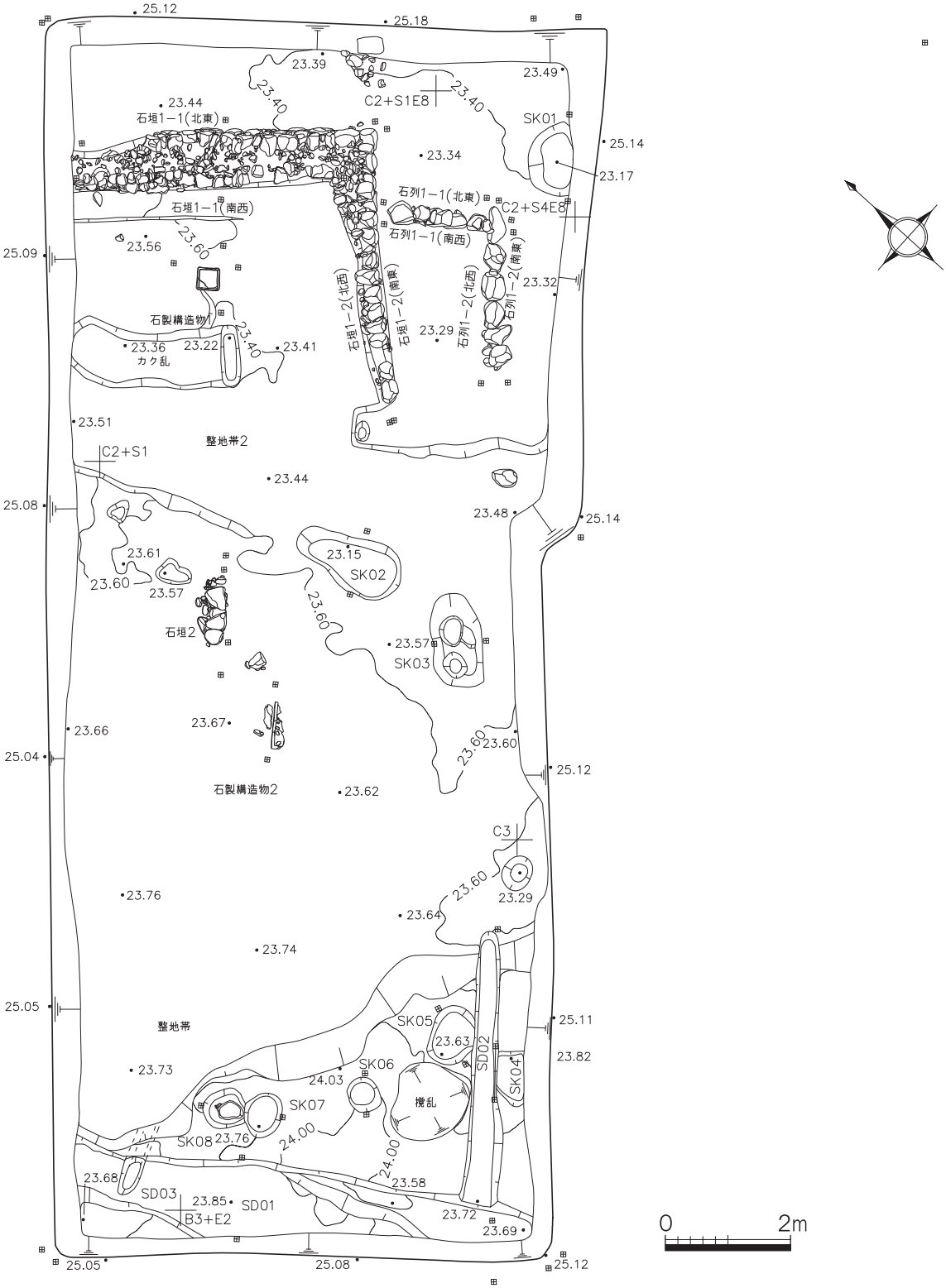
近世では､金沢城跡が平成20年（2008）に国史跡に指定され､以後発掘調査成果を基に五十間長屋･橋爪門・河北門や玉泉院丸庭園などが復元・整備されている。金沢城下の範囲を規定する惣構跡は慶長４年（1599）に内惣構が造られ、次いで外惣構が整備されている。現在、土居は盛土のほとんどを消失し、堀も規模を縮小して水路として機能するのみだが、金沢市では惣構跡の確認調査を断続的に行っており、復元された線形は市指定史跡として保護され、東内惣構跡枯木橋北地点（C)、同南地点（G)、西内惣構跡主計町地点（D)、西外惣構跡升形地点（E）の復元整備が実施されている。

当遺跡周辺では多くの近世遺跡の発掘調査が実施されている。前田氏（長種系）屋敷跡地区（2）では当該期の井戸、土坑の他、それ以前の屋敷地、井戸などが確認された。長氏屋敷跡地区（48）では確認調査が行われ、17世紀前半の整地層が見つかった。本多氏の下屋敷である本多町三丁目地点（45）の調査では、屋敷地及び道路跡、辰巳用水の分流などが確認されている。2011年に発掘調査が行われた兼六元町７番地点（52）では石高150～500クラスの武家地跡を調査し、区画溝や石列を確認している。この調査で見つかった井戸の枠は船の底板を分割して利用しており、近世の船の構造を知る上で重要な発見となった。広坂遺跡、丸の内７番地点（10）では、礎石建物、井戸、土塀の基礎など上級武士の屋敷地及び道路跡が検出されている。



第４図　城下町復元図と調査された遺跡〔S=1/25,000〕

1.兼六元町15番地点 2.前田氏（長種系）屋敷跡地区 3.兼六園江戸町推定地地点 4･5.本多氏屋敷跡地区 6･7.広坂遺跡 8.下本多町地点 9.兼六元町3番地点 10.丸の内7番地点 11.高岡町一ツ水溜跡地点 12.高岡町3番地点 13･14.高岡町地点 15.彦三町一丁目8番地点 16.彦三町一丁目15番地点 17.青草町地点 18.下堤町地点 19.安江町地点 20.瓢箪町遺跡 21.片町二丁目遺跡（13番地点） 22.片町二丁目遺跡（5番地点） 23.長町遺跡 24.穴水町遺跡 25~28.本町一丁目遺跡 29.木ノ新保遺跡（7番丁地点） 30.木ノ新保遺跡（安江町地点） 31.久昌寺遺跡 32･33.宝町遺跡 34.経王寺遺跡 35.三社町遺跡 36.元菊町遺跡 37.昭和町遺跡 38.長田町遺跡 39.醒ヶ井町遺跡 40.東兼六町5番地区 41.玉川町遺跡 42.東山一丁目遺跡（3番地点） 43.東山南水溜跡 44.東兼六地点 45.本多町三丁目地点 46.小立野四丁目遺跡 47.小立野ユミノマチ遺跡 48.長氏屋敷跡地区 49.飛梅町3番地点 50.森山二丁目遺跡 51.大手町3番地点 52.兼六元町7番地点
A,B.西外惣構跡武蔵町地点 C.東内惣構跡枯木橋北地点 D.西内惣構跡主計町地点 E.西外惣構跡升形地点
F.西外惣構跡本多町三丁目地点 G.東内惣構跡枯木橋南地点 ･･･以上、地区・地点呼称分は金沢城下町遺跡
a.金沢城跡（石川門前土橋） b.金沢城跡（車橋） c.金沢城跡（宮守堀） d.金沢城跡（新丸） e.金沢城跡（金谷出丸）
あ.犀川大橋 い.香林坊橋 う.袋町橋 え.枯木橋 お.浅野川大橋



第５図　遺構全体図〔S=1/100〕写真

第３章　遺構と遺物

調査区は調査直前まで駐車場として利用されていたが、それ以前は民家が建っていたと思われる。表土掘削の際に浄化槽やコンクリート基礎、塩ビパイプなどが残っていた。

SK01（第５・７・９図）　調査区北東で検出し一部は壁にかかっていたため平面形は不明である。規模は短径 (70)㎝、長径 120㎝、深さ 67㎝である。出土遺物は第９図１、肥前産陶器小坏である。17 世紀前半代のものである。第９図２は産地不明の陶器土瓶の底部で、外面底部に足が１個残存している。18 世紀後半以降のものか。第９図３は在地産土師器灯明皿である。灯芯油痕が残る。17 世紀後半のものか。SK01 は概ね 18 世紀後半以降に埋められた土坑と考えられる。

SK02（第５・７図）　調査区中央東寄りで検出された。平面形は不整形で、規模は短径 50㎝、長径 170㎝、深さ 70㎝である。出土遺物は無い。

SK03（第５・７・９図）　調査区中央南東より出検出された土坑で、平面形は楕円形を呈する。規模は短径 59㎝、長径 150㎝、深さ 32㎝を計る。出土遺物は第９図４のいぶし平瓦片である。

SK04（第５・７図）　調査区南端で検出された。平面形は調査区にかかるため不明である。規模は検出できた短径が 42㎝、長径 90㎝、深さ 14㎝である。SD02 に切られる。出土遺物は無い。

SK05（第５・７・９図）　調査区南端で検出された。平面形は楕円形を呈し、規模は短径 68㎝、長径 95㎝、深さ 60㎝を計る。SD02 に切られる。出土遺物は第９図５で在地産土師器灯明皿である。灯芯油痕が確認できる。17 世紀前半のものである。

SK06（第５・７図）　調査区南西中央よりで検出された土坑で、平面形は円形を呈する。規模は短径 50㎝、長径 57㎝、深さ 87㎝を計る。出土遺物は無い。

SK07（第５･７･９図）　調査区南西で検出された土坑で､平面形は楕円形である。規模は短径 59㎝、長径 70㎝、深さ 50㎝を計る。SK08 を切る。出土遺物は第９図６、須恵器の甕片で外面に敲き痕、内面に当具痕が見られる。第９図７は在地産土師器灯明皿である。時期は不明。

SK08（第５・７図）　調査区南西で検出された土坑で、平面形は円形、規模は短径 60㎝、遺存していた長径は 60㎝、深さ 35㎝で底から礎石が検出された。SK07 に切られる。SK04 と SK06 と SK08 は一直線上に並び､柱間距離は約 2.3m であることから建物の一部である可能性が高い。出土遺物は無い。

SD01（第５・７図）　調査区南西端で検出された溝で、北 - 南方向に流れる。規模は遺存していた幅は 105㎝、深さ 18㎝である。

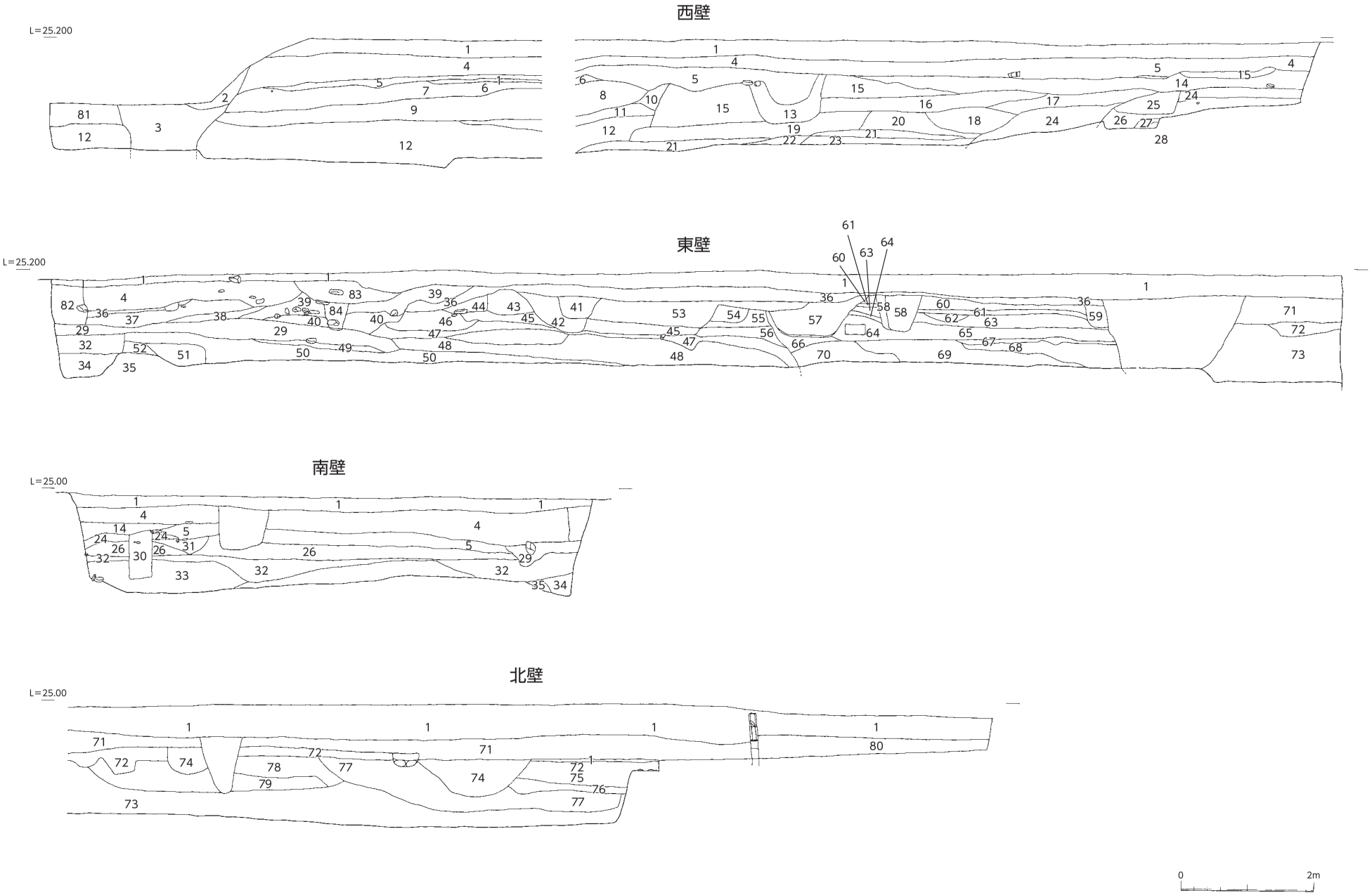
SD02（第５・７図）　調査区南側で検出された溝で、北東 - 南西方向に流れる。規模は幅 60㎝、深さ 46㎝である。出土遺物は無い。

SD03（第５・９図）　調査区西側で検出された溝で、北東 - 南西方向に流れる。規模は幅 30㎝、深さ５㎝である。出土遺物は第９図８は瀬戸美濃産陶器鬢盥である。第９図９は在地産土師器灯明皿である。口縁部に灯芯油痕が見られる。17 世紀後半のものである。第９図 10 はいぶし瓦の平瓦片である。

石垣１―１（第５・８・９図）　調査区北側で検出された石垣で、北西 - 南東方向である。規模は検出されただけで長さ 485㎝、幅約 90㎝、２段目まで残存していた。出土遺物は石垣を断ち割った際に確認している。第９図 11 は肥前産陶器のすり鉢で 17 世紀中頃に作られたものである。

石垣１―２（第５・８図）　調査区北側で検出された石垣で石垣１―１から南西方向にほぼ直角に続く。北東 - 南西方向で、規模は長さ 448㎝残存し、幅は約 70㎝、１段目が大部分を占めるが、一部２段残存しているヵ所が残る。出土遺物は確認できなかった。

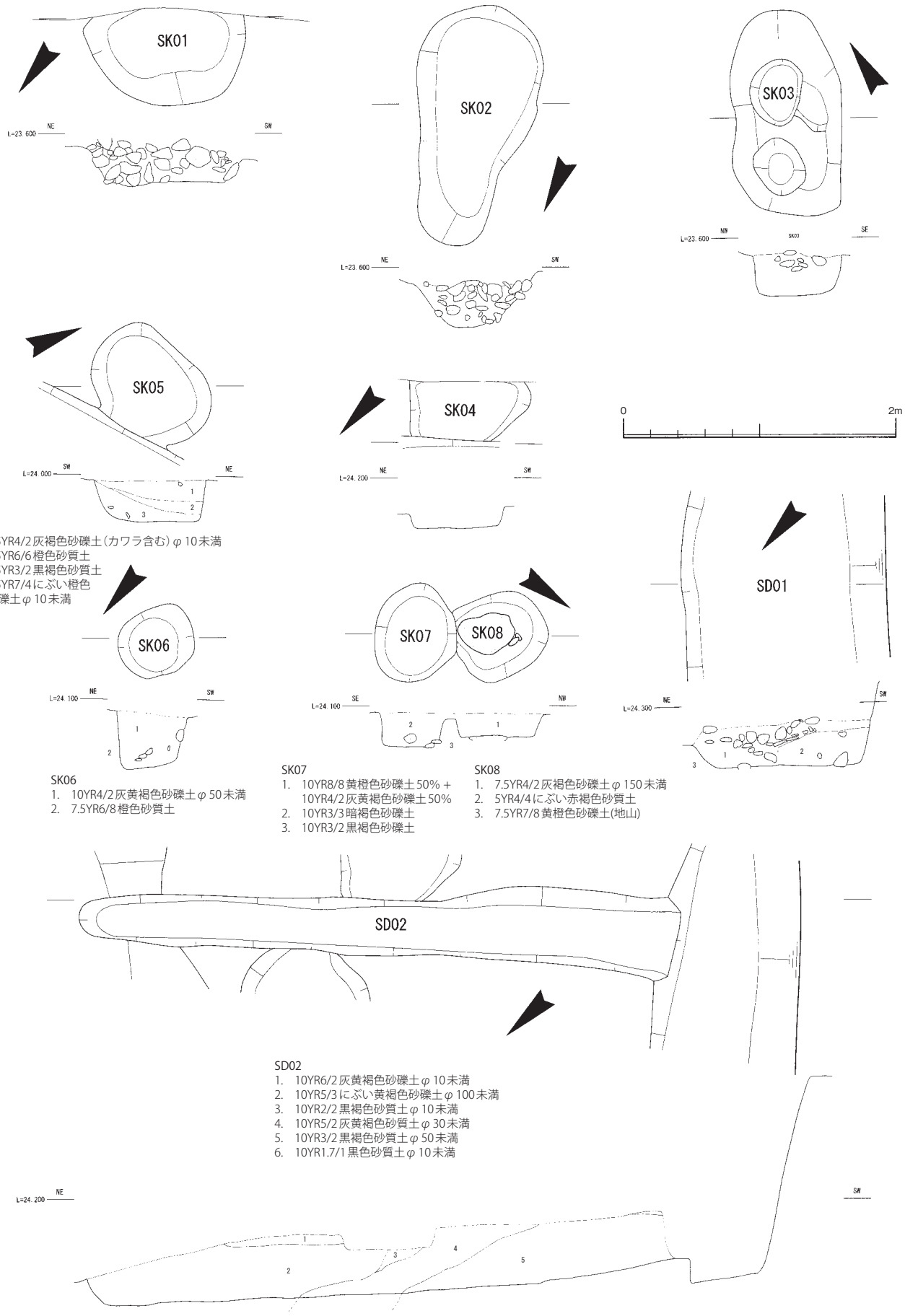
石垣２（第５・８図）　調査区中央北寄りで検出された石垣で一部分しか残っていない。北東―南



第６図　調査区壁断面図〔S=1/80〕

調査区壁土色

1. 砕石
2. 7.5YR3/1 黒褐色崩落痕５０％+10YR8/8 黄橙色砂礫土５０％
3. 10YR2/2 黒褐色砂礫土φ 300 ～大石混
4. 2.5YR6/1 赤灰色砂礫土（コンガラ混）
5. 10YR1.7/1 黒色砂礫土（ガラス片　鉄クズ混　コンガラ混）
6. 10YR8/8 黄橙色シルト（一部粘質土）+7.5YR5/4 にぶい褐色粘質土混入
7. 10YR3/1 黒褐色砂礫土φ 100 ～礫混
8. 10YR4/3 にぶい黄褐色礫（整地層）
9. 10YR3/1 黒褐色シルトφ 100 ～礫混
10. 2.5YR6/1 赤灰色砂礫土（カク乱）近代配管・埋設痕
11. 7.5YR5/4 にぶい褐色砂質土
12. 10YR3/2 黒褐色シルト礫混極少
13. 10YR4/3 にぶい黄褐色礫（カク乱）φ 300 ～大石混
14. 10YR4/3 にぶい黄褐色砂質土φ 100 未満礫混
15. 10YR4/3 にぶい黄褐色礫（整地層）
16. 7.5YR4/2 灰褐色砂礫土φ 150 ～石混
17. 7.5YR4/2 灰褐色砂質土φ 100 未満礫混
18. 10YR4/3 にぶい黄褐色礫（カク乱）
19. 7.5YR6/4 にぶい橙色砂質土φ 100 未満礫混
20. 7.5YR6/4 にぶい橙色砂（単層）
21. 10YR2/3 黒褐色シルト（上層より更に礫極少）
22. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質土
23. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂礫土
24. 7.5YR4/2 灰褐色砂質土礫極少
25. 10YR8/8 黄橙色砂礫土
26. 7.5YR2/1 黒色シルト（地山質）
27. 2.5Y3/2 黒褐色砂質土
28. 7.5Y3/1 オリーブ黒色地山質
29. 7.5YR4/3 褐色砂礫土φ 50 未満
30. 10YR3/3 暗褐色砂質土φ 100 未満かなりサラサラ〔SD02〕
31. 2.5Y7/4 浅黄色砂質土
32. 10YR4/2 灰黄褐色砂質土φ 50 未満炭化物含む
33. 10YR4/6 褐色砂質土
34. 10YR3/2 黒褐色砂質土φ 50 未満
35. 10YR7/6 明黄褐色礫（地山）φ 300over
36. 7.5YR2/1 黒色砂礫土（コンガラ混）
37. 10YR5/3 にぶい黄褐色砂礫土φ 30 未満
38. 10YR6/1 褐灰色砂質土（炭化物混）
39. 7.5YR3/1 黒褐色砂礫土コンガラ混
40. 10YR4/4 褐色砂質土
41. 10YR2/1 黒色砂礫土（カク乱）
42. 10YR5/6 黄褐色砂礫土（レンガ混）
43. 7.5YR5/2 灰褐色砂礫土（浅黄橙色砂ブロック含む）
44. 10YR8/8 黄橙色砂質土（カク乱）φ 250 ～大礫混
45. 10YR5/3 にぶい黄褐色砂礫土
46. 10YR4/1 褐灰色砂礫土
47. 10YR5/2 灰黄褐色砂質土（礫含む）
48. 10YR4/2 灰黄褐色砂質土（礫含む）〔近・瓦〕
49. 7.5YR5/3 にぶい褐色砂礫土φ 50 未満
50. 7.5YR3/2 黒褐色砂質土φ 100 未満
51. 7.5YR6/1 褐灰色砂礫土φ 300over
52. 7.5YR5/3 にぶい褐色砂礫土φ 100 未満
53. 2.5Y5/1 黄灰色砂礫土（カク乱）
54. 7.5YR8/8 黄橙色礫
55. 10YR7/4 にぶい黄橙色砂礫土
56. 7.5YR3/1 黒褐色砂礫土
57. 10YR5/1 褐灰色砂礫土〔近代瓦・植木鉢〕
58. 7.5YR5/3 にぶい褐色砂礫土（カク乱）粒径大〔58 南側〕
58. 7.5YR5/3 にぶい褐色砂礫土（カク乱）粒径小〔58 北側〕
59. 10YR4/2 灰黄褐色砂礫土（橙砂含む）
60. 7.5YR7/6 橙色砂礫土
61. 7.5YR7/1 明褐灰色砂質土
62. 7.5YR7/1 明褐灰色砂
63. 10YR7/4 にぶい黄橙色砂礫土
64. 7.5YR7/1 明褐灰色
65. 10YR6/3 にぶい黄橙色砂礫土（近代・近世）+10YR4/1 褐灰色
66. 10YR4/1 褐灰色砂礫土
67. 10YR3/1 黒褐色（硬化面）砂粒密
68. 10YR3/1 黒褐色砂質土砂粒粗
69. 10YR6/3 にぶい黄橙色礫（整地又は埋立層）
70. 10YR3/2 黒褐色砂質土
71. 10YR5/1 褐灰色砂礫土
72. 10YR8/8 黄橙色シルト（単層）
73. 10YR3/2 黒褐色砂礫土φ 300 ～大礫混
74. 10YR8/8 黄橙色５０％+10YR5/1 褐灰色５０％
75. 10YR2/1 黒色φ 150 未満礫混
76. 10YR2/2 黒褐色砂質土（φ 20 未満礫混）
77. 10YR2/1 黒色砂質土φ 100 未満礫混
78. 7.5YR2/1 黒色砂礫土
79. 10YR3/1 黒褐色φ 250 ～
80. 2.5Y6/2 灰黄色砂（崩落激！）
81. 10YR3/2 黒褐色
82. 7.5YR4/2 灰褐色砂礫土（コンガラ混）カク乱
83. 10YR5/3 にぶい黄褐色砂質土（カク乱）砂と石
84. 7.5YR4/1 褐灰色砂礫土コンガラ混
85. 7.5YR4/1 褐灰色砂礫土



SK05
1. 7.5YR4/2灰褐色砂礫土(カワラ含む)φ10未満
2. 7.5YR6/6橙色砂質土
3. 7.5YR3/2黒褐色砂質土
4. 7.5YR7/4にぶい橙色砂礫土φ10未満

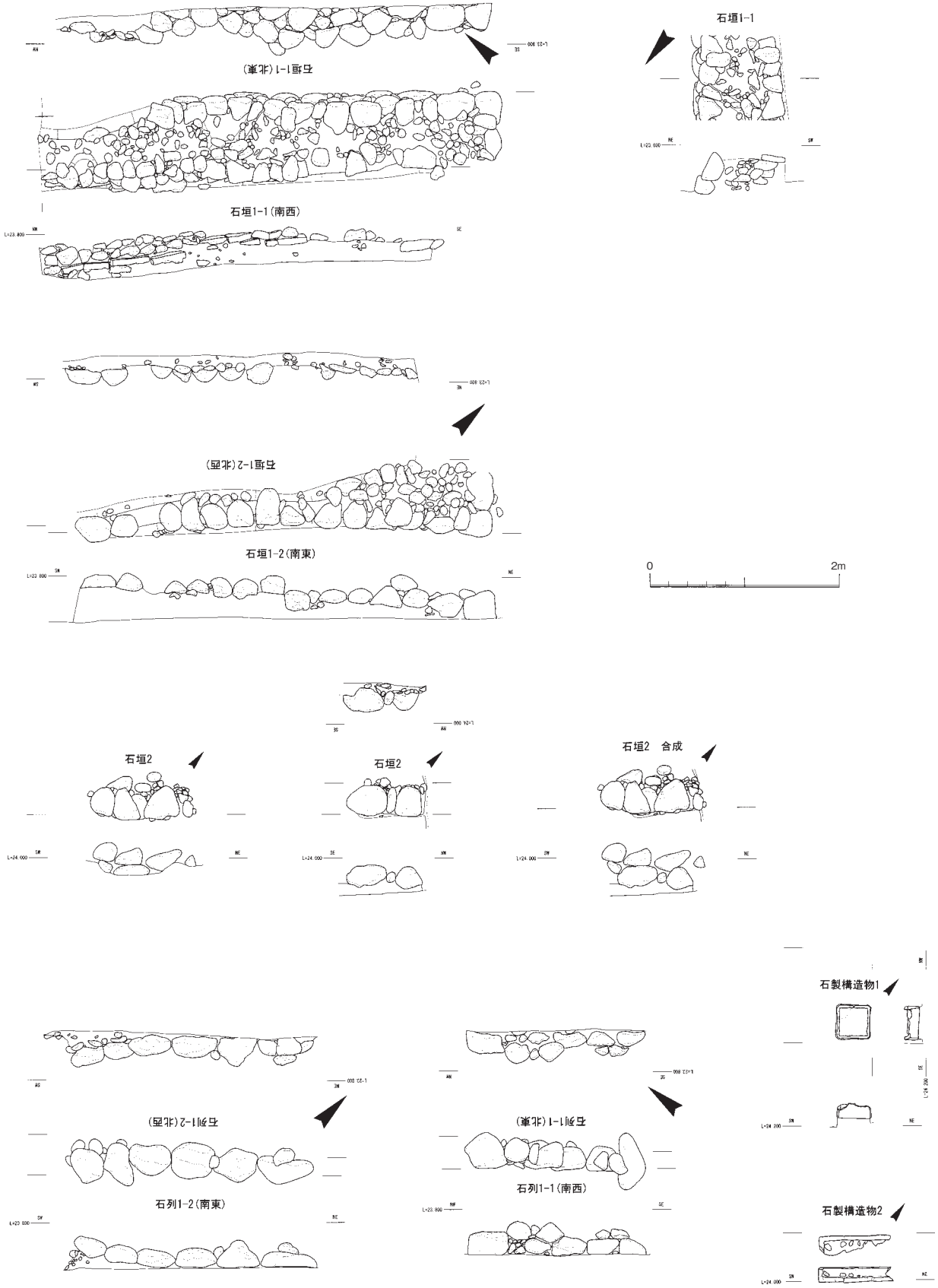
SK06
1. 10YR4/2灰黄褐色砂礫土φ50未満
2. 7.5YR6/8橙色砂質土

SK07
1. 10YR8/8黄橙色砂礫土50%＋10YR4/2灰黄褐色砂礫土50%
2. 10YR3/3暗褐色砂礫土
3. 10YR3/2黒褐色砂礫土

SK08
1. 7.5YR4/2灰褐色砂礫土φ150未満
2. 5YR4/4にぶい赤褐色砂質土
3. 7.5YR7/8黄橙色砂礫土(地山)

SD02
1. 10YR6/2灰黄褐色砂礫土φ10未満
2. 10YR5/3にぶい黄褐色砂礫土φ100未満
3. 10YR2/2黒褐色砂質土φ10未満
4. 10YR5/2灰黄褐色砂質土φ30未満
5. 10YR3/2黒褐色砂質土φ50未満
6. 10YR1.7/1黒色砂質土φ10未満

第７図　遺構平・断面図〔S=1/40〕



第８図　遺構平・立面図〔S=1/60〕

西方向で規模は、残存していた長さが110cm、幅約48cmである。１段目までしか残っていなかった。出土遺物は無い。

石列１―１（第５・８図） 石垣１―２のすぐ南東隣で確認された石列である。北西―南東方向で、規模は長さ270cm、幅約36cm、１段目まで残存していた。出土遺物は確認できなかった。

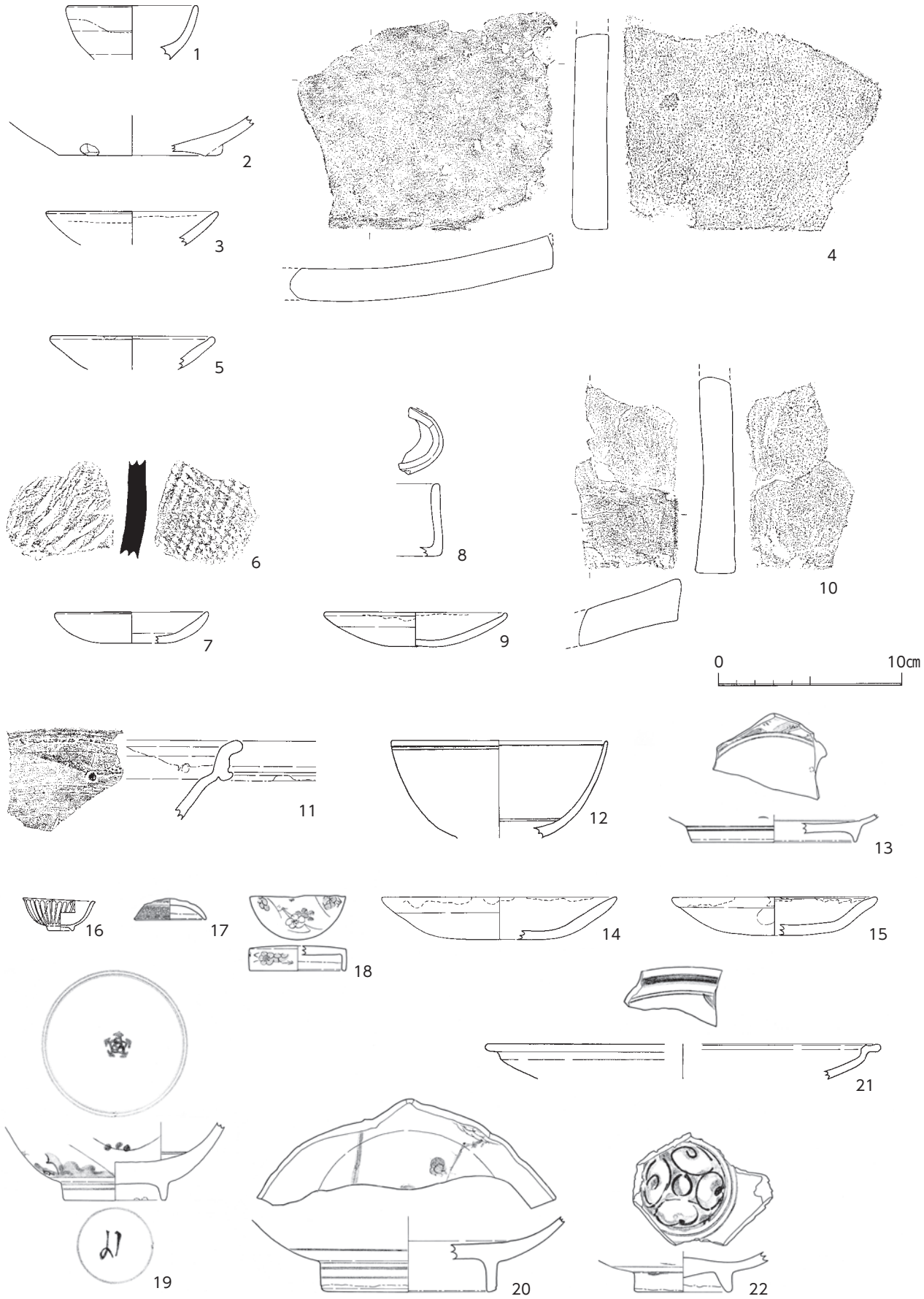
石列１―２（第５・８図） 石列１―１～南西報告にほぼ直角に続く。北東―南西方向で、規模は長さ270cm、幅約40cmで、１段目まで残存していた。出土遺物は確認できなかった。

石製構造物１（第５・８・13図） 第13図１は風炉の炉石である。全面に加工時のノミ跡が残存している。

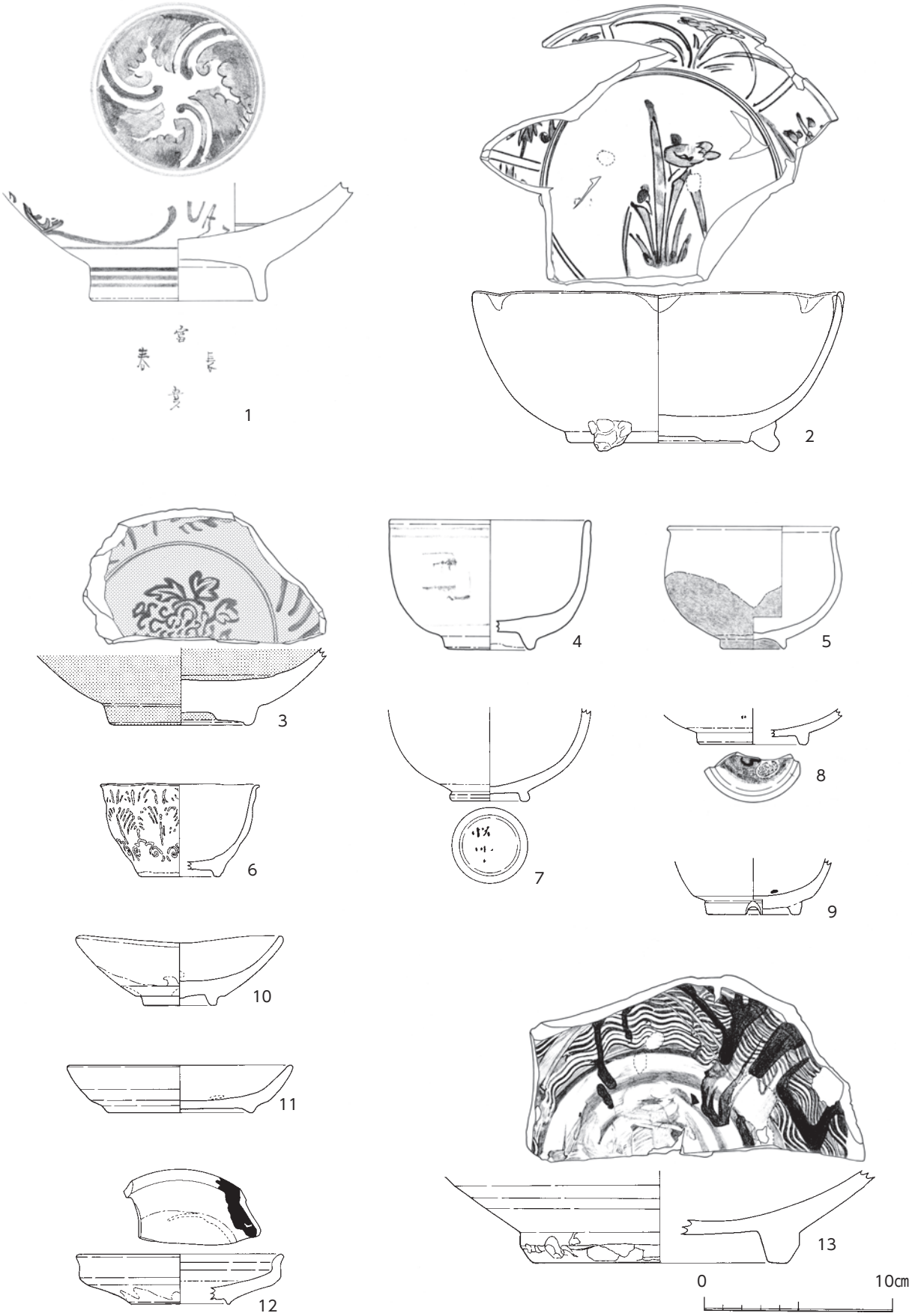
石製構造物２（第５・８図） 洗い場の流し台の一部か。

整地層（第９図） 第９図12は肥前産磁器碗である。17世紀後半～18世紀前半に作られたものである。第９図13は肥前産磁器皿で17世紀中頃～17世紀後半のものである。第９図14は在地産土師器灯明皿で口縁部に灯芯油痕が残る。17世紀中頃のものか。第９図15は在地産土師器皿で口縁が外反し、灯芯油痕が残る。17世紀後半のものである。

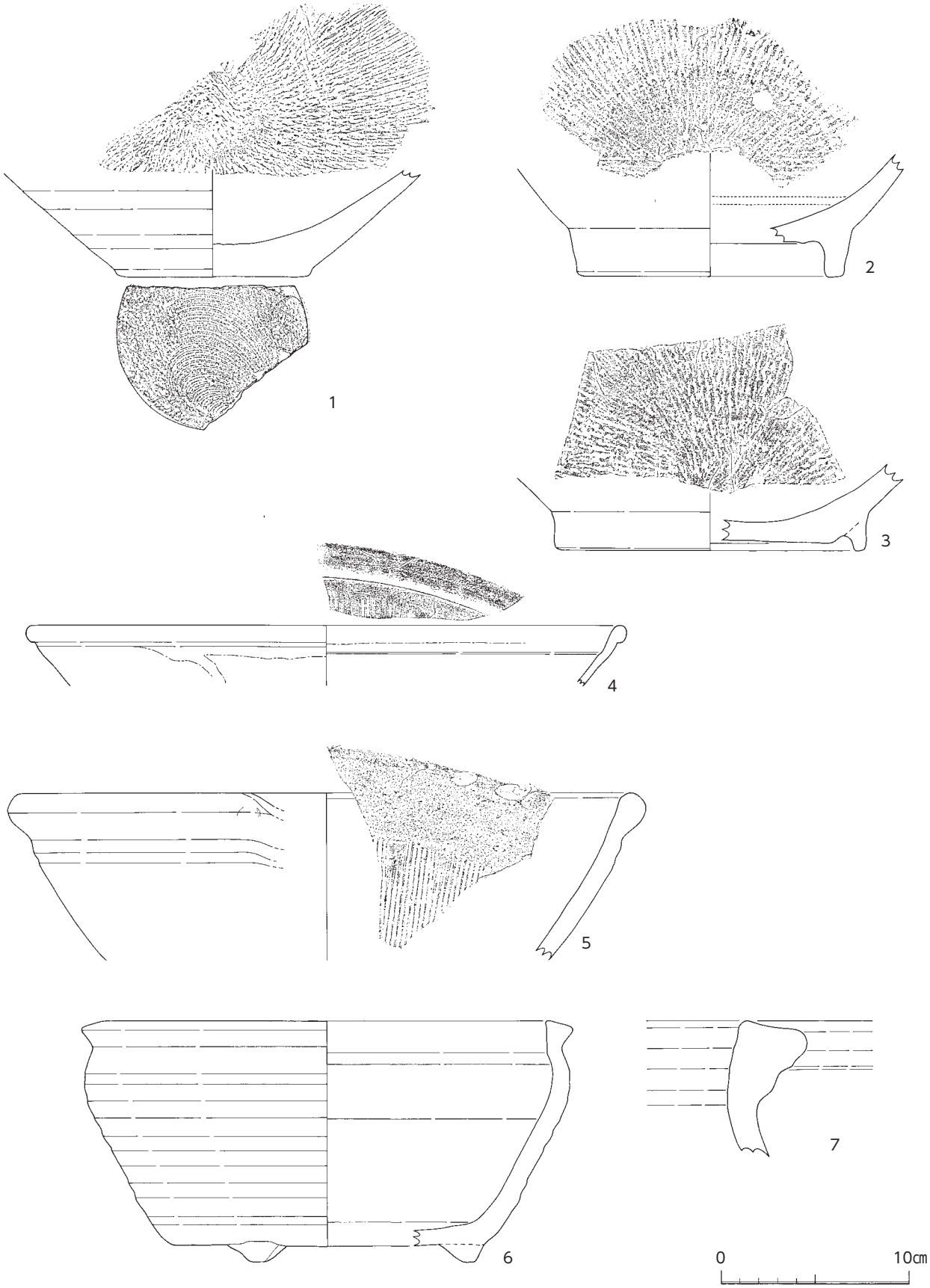
包含層（第９～14図） 第９図16は肥前産磁器紅皿である。型押し成形で外面は貝殻状で白磁のものである。第９図17･18は肥前産磁器合子蓋で17は型押し成形である。18は色絵が施されている。第９図19は肥前産磁器碗で見込みにコンニャク印判の五弁花文がある。高台内には銘が描かれている。17世紀末のものか。第９図20は肥前産磁器鉢である。17世紀後半のものか。第９図21は肥前産磁器皿で口縁が折り縁状になっている。焼成不良か胎土が赤っぽくなっている。17世紀前半のものであろう。第９図22は中国産漳州窯の磁器碗である。第10図１は肥前産磁器鉢で高台内に「冨貴長春」の銘が描かれている。この銘は18世紀代に長く用いられる。第10図２は肥前産磁器鉢で内面に芙蓉手風の文様が描かれている。高台は蛇目凹形高台で、鉄錆が塗布されている。三足になると思われるが２個だけ足が残存している。17世紀後半～18世紀後半のものであろう。第10図３は肥前産磁器鉢で青磁釉が施されている。波佐見地方で製作されたもので内面は型打ち成形で陰刻が見られる。高台は蛇目凹形高台となっている。17世紀後半のものである。第10図４は肥前産陶器碗で鉄絵が描かれている。17世紀末～18世紀前半のものである。第10図５は京･信楽産の陶器碗で鉄釉と透明釉が掛け分けられている。第10図６は産地不明の陶器碗である。口縁部は外反し、鉄釉が掛けられている。外面が型打ち成形で細かな草花文様が施されている。第10図７は京･信楽産の陶器碗で高台内に判読不明の墨書が残る。第10図８は京･信楽産の陶器碗で高台内に「岩倉」の刻印が見られる。第10図９は産地不明の陶器碗で高台が割高台となっている。第10図10は肥前産陶器皿で見込み及び外面底部に胎土目跡が各４個残存している。16世紀末～17世紀初頭のものである。第10図11は美濃産陶器皿で長石釉が施されている。内外面に円錐ピンの跡が各２個ずつ残存している。第10図12は越中瀬戸産陶器皿で鉄釉が施され一部に灰釉が掛けられている。体部から口縁部に掛けて立ち上がり、口縁部はやや外反する。見込みは釉が拭き取られているが、拭き取りきれなかった部分に重ね積みで焼いた別の皿の高台跡が残存している。第10図13は肥前産陶器鉢で刷毛目櫛書き文が施されている。内面に砂胎土目跡が２個残存している。高台外面は面取りされている。18世紀代のものである。第11図１～４は肥前産陶器すり鉢である。１はロクロ成形され底部に糸切り痕が残る。17世紀後半のものである。２もロクロ成形で見込みに輪状の砂目跡が残る。内面はマメツしている。18世紀代のものである３は敲き成形のもので、外面底部に砂胎土目跡が２個残存している。内面はマメツしている。18世紀代のものである。４はロクロ成形のもので17世紀後半のものである。第11図５は産地不明の陶器すり鉢である。第11図６は越前産陶器鉢で三足が付く。外面には鉄泥が施されている。19世紀代のものである。第11図７は越前産陶器甕で鉄泥が施されている。18世紀末～19世紀代のものであろう。



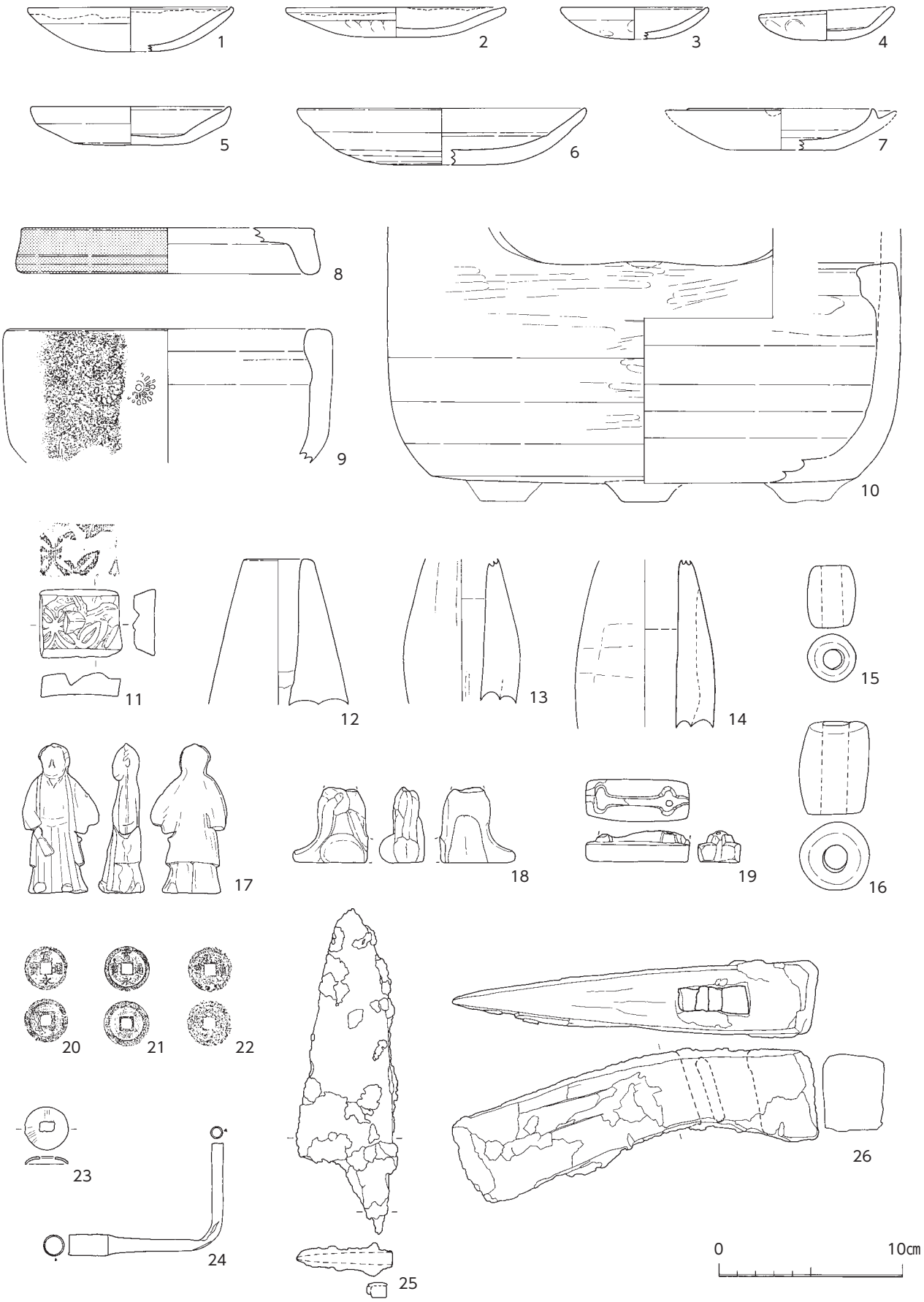
第９図　SK01（1 ～ 3）、SK03（4）、SK05（5）、SK07（6･7）、SD03（8 ～ 10）、整地層（11 ～ 15）、包含層（16 ～ 22）
出土遺物実測図〔S=1/3〕



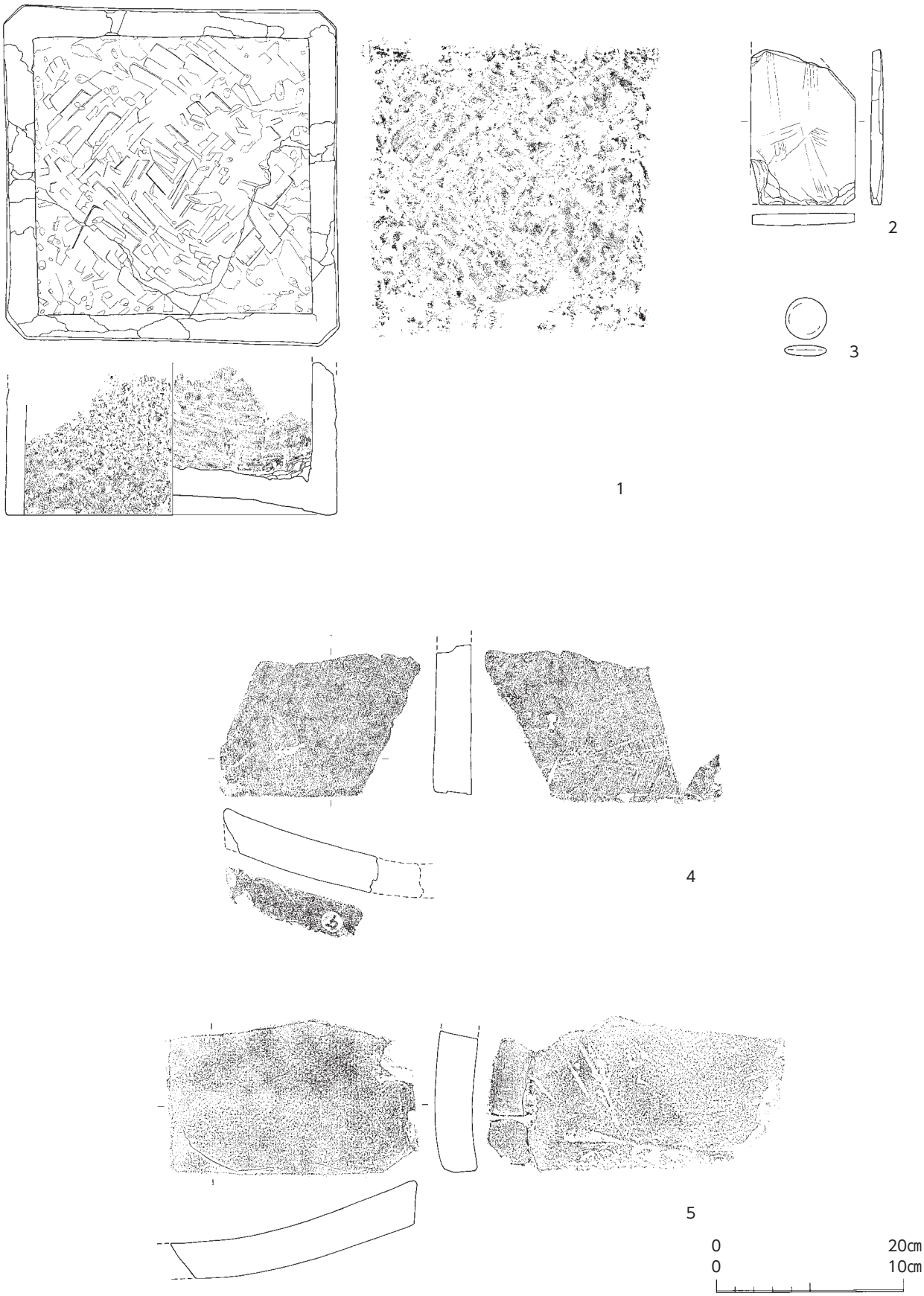
第10図　包含層出土遺物実測図〔S=1/3〕



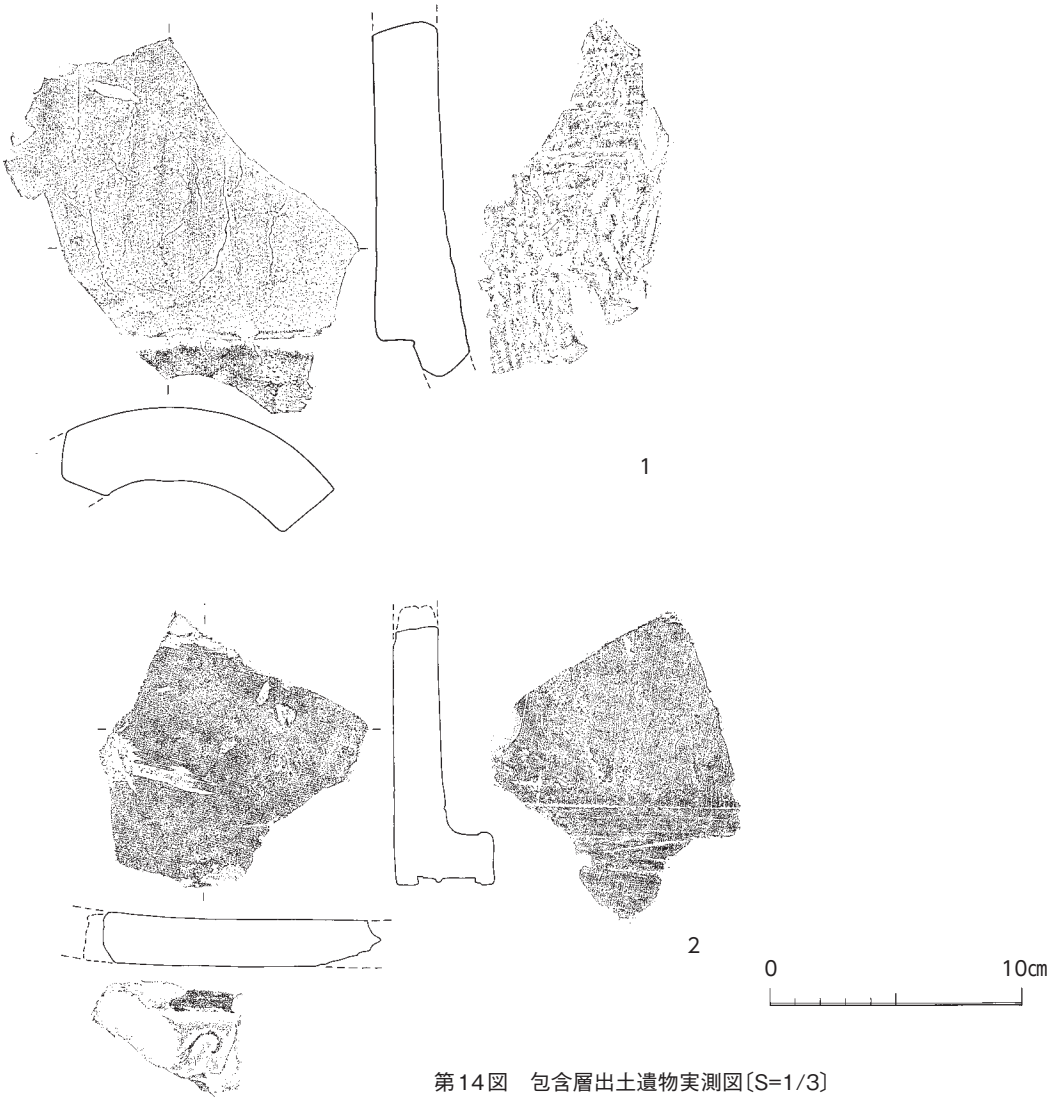
第11図　包含層出土遺物実測図〔S=1/3〕



第12図　包含層出土遺物実測図〔S=1/3〕



第13図　包含層出土遺物実測図〔1:S=1/6、2～5：S=1/3〕



第14図　包含層出土遺物実測図〔S=1/3〕

第12図１～４、６は在地産土師器灯明皿である。１は端部が軽く内側に折れる。17世紀末のものである。２は端部が外反し、外面に指頭圧痕が残る。高さは低い。17世紀後半のものか。３は小ぶりのもので底部が丸い。体部から口縁部に掛けても緩やかに内湾する。17世紀後半のものか。４も小ぶりのものであるが、型打ち成形のものである。18世紀末～19世紀初頭のものである。６はロクロ成形のもので、外面口縁部がナデ、体部がケズリ成形されている。近代のものか。５は産地不明の土師器灯明皿で胎土は白っぽくきれいである。口縁部は強いナデ成形で立ち上がる。第12図７は在地産土師器灯明受け皿である。17世紀後半～17世紀末のものか。第12図８は在地産土器火消し壺の蓋である。外面に赤色顔料が塗布されている。第12図９は在地産土器火鉢で外面に赤漆、口縁部に黒漆が塗布されている。外面には印花が押印されている。第12図10は在地産土器焜炉で窓部分に煤が付着している。三足中１個だけ足が残存している。第12図11は在地産土器七輪の体部にある窓部分の蓋で、外面には七宝と紅葉の刻印が見られる。第12図12～14は在地産土器焼塩壺である。第12図15・16は在地産の土錘である。第12図17～19は在地産土人形である。17は男性立像、18は女性座像、19は人形等の台座部分である。第12図20～22は寛永通宝である。20は古寛永、21と22は新寛永である。第12図23は銅製の飾り金具である。第12図24は銅製の煙管の吸い口である。第12図25は鉄製の包丁である。第12図26は鉄製の割斧でクサビが残存している。第13図２は砥石である。第13図３は黒い碁石で、包含層から同じ黒い碁石が他に３点出土している。第13図４・５はいぶし瓦の平瓦片である。４は刻印が１個押されている。第14図１はいぶし瓦の丸瓦である。内面には刺縫痕とコビキＢ技法による粘土切り離し痕が残る。第14図２はいぶし瓦の軒平瓦で軒の見える部分に文様が見られる。

第１表　出土遺物観察表

単位（mm）

図版番号	番号	調査区	遺構	器種種別	法量 a b	法量 c d	遺存/12	釉薬絵付	胎土色調 外面	胎土色調 内面	産地	備考	実測番号
第9図	1		SK01	小坏 陶器	72 －	(30) －	口 2	灰釉	10YR6/1 褐灰		肥前		M3
	2		SK01	土鍋か 陶器	－ 80	(22) －	底 2	鉄釉	10YR8/3 浅黄橙		不明	外面底部に足１個残	M2
	3		SK01	土師器 皿 土器	94 －	(18) －	口 2		10YR8/3 浅黄橙		在地	灯芯油痕 2/12 以上	M4
	5	SLU 70	SK05	土師器 皿 土器	90 －	(18) －	口 1		10YR8/3 浅黄橙		在地	灯芯油痕１ヵ所以上	M6
	6	GLU 70	SK07	甕 須恵器	－ －	(54) －	破片	灰釉	N6 灰			外面敲痕、内面当具痕	M7
	7	GLU 70	SK07	土師器 皿 土器	84 内 49	17 －	口 1		10YR8/3 浅黄橙		在地		M8
	8	BLU 140	SD03	鬢盥 陶器	－ －	40 －		灰釉	2.5Y8/1 灰白		瀬戸 美濃		M9
	9	GLU 140	SD03	土師器 皿 土器	100 内 30	19 －	口 1		7.5YR8/4 浅黄橙		在地	灯芯油痕 1/12 以上	M11
	11	石垣 断割		すり鉢 陶器	276 －	(43) －	口 1 以下	鉄釉	7.5YR6/3 にぶい褐		肥前	口縁部に溶着痕有	Q17
	12	GLU 140	整地層	碗 磁器	118 －	(53) －	口 1	透明釉 染付	N9 白		肥前		Q25
	13	GLU 140	整地層	皿 磁器	－ 90	15 －	底 2	透明釉 染付	N9 白		肥前	高台内１重圏線	Q26
	14	GLU 140	整地層	土師器 皿 土器	112 内 66	21 －	口 3		5YR7/6 橙		在地	灯芯油痕 2/12 以上 指頭圧痕 胎土に赤色粒少量混	Q28
	15	GLU 140	整地層	土師器 皿 土器	128 内 68	23 －	口 2		10R8/3 浅黄橙		在地	灯芯油痕 1/12 以上	Q27
	16	GLU 70- 120	包含層	紅皿 磁器	39 15	18 －	口 11 底 12	透明釉	N9 白		肥前	型押成形	Q3
	17	GLU 70- 120	包含層	合子蓋 磁器	39 ツマミ－	12 －	口 11	透明釉 染付	N9 白		肥前	型押成形	Q4
	18	GLU 70- 120	包含層	合子蓋 磁器	52 ツマミ－	14 53	口 4	透明釉 色絵	N9 白		肥前	色絵（赤・緑・黒）	Q5
	19	GLU 70	包含層	碗 磁器	－ 56	(43) －	底 9	透明釉 染付	N9 白		肥前	見込みコンニャク印判五弁花 高台内１重圏線、銘有	M12
	20	GLU 70- 120	包含層	鉢 磁器	－ 95	(41) －	底 3	透明釉 染付	N9 白		肥前	高台内１重圏線	Q7
	21	GLU 70- 120	包含層	皿 磁器	216 －	(19) －	口 1 以下	透明釉 染付	10YR8/1 灰白		肥前		Q6
	22	GLU 70- 120	包含層	碗 磁器	－ 53	(22) －	底 5	透明釉 白泥 染付	10YR8/3 浅黄橙		中国	漳州窯　高台砂付着	Q10
第10図	1	GLU 70	包含層	鉢 磁器	－ 94	(63) －	底 12	透明釉 染付	N9 白		肥前	貫入有 高台内銘「冨貴長春」	M1
	2	GLU 70- 120	包含層	鉢 磁器	197 87	94 －	口 4 底 9	透明釉 染付	N9 白		肥前	六弁花　蛇目凹形高台 見込に胎土目３残 足３個中２個残	Q9
	3	GLU 70- 120	包含層	鉢 磁器	－ 77	(41) －	底 6	青磁釉	N8 白		肥前	蛇目凹形高台 内面型打　陰刻	Q8
	4	GLU 70- 120	包含層	碗 陶器	107 48	65 －	口 8 底 8	透明釉　白泥 鉄絵	N7 灰白		肥前	畳付無釉 施釉部分貫入	Q2
	5	GLU 70- 120	包含層	碗 陶器	90 36	65 胴 94	口 1 底 12	透明釉 鉄釉	2.5Y8/2 灰白		京・信		Q1
	6	GLU 70- 120	包含層	碗 陶器	84 43	49 －	口 3 底 5	鉄釉	2.5Y7/1 灰白		不明	型押成形　口縁部八角形 口縁の一部に焼成前の欠け有	Q11

第１表　出土遺物観察表

単位（mm）

図版番号	番号	調査区	遺構	器種種別	法量 a b	法量 c d	遺存/12	釉薬絵付	胎土色調 外面	胎土色調 内面	産地	備考	実測番号
第10図	7	GLU 70	包含層	碗 陶器	－ 42	(50) －	底 12	透明釉 白化粧土	10YR8/2 灰白		京・信	高台内墨書有	M19
	8	GLU 70	包含層	碗 陶器	－ 59	(19.5) －	底 4	透明釉 色絵	2.5Y8/3 淡黄		京・信	色絵（緑）高台内墨書有 高台内刻印「岩倉」	M23
	9	GLU 70	包含層	碗 陶器	－ 50	(30) －	底 6	灰釉 鉄釉	N8 灰白		不明	割高台１ヵ所残 見込みに鉄釉	M14
	10	GLU 70	包含層	皿 陶器	110 39	37 －	口 6 底 12	灰釉	N8 灰白		肥前	見込み及び外面底部に胎土目各４個　歪み大	M13
	11	GLU 70	包含層	皿 陶器	120 78	25 －	口 2 底 7	長石釉	10YR8/3 浅黄橙		美濃	高台内無釉 見込み及び高台内に円錐ピン痕２ヵ所ずつ残	M16
	12	GLU 70	包含層	皿 陶器	110 53	27 －	口 3 底 3	灰釉 鉄釉	N8 灰白		越中瀬戸	見込み釉拭き取り 見込み重ね積み痕	M15
	13	GLU 70-120	包含層	鉢 陶器	－ 137	(49) －	底 5	鉄釉　白泥 刷毛目　櫛書	10R5/4 赤褐		肥前	内面砂胎土目跡２個残	Q12
第11図	1	GLU 70-120	包含層	すり鉢 陶器	－ 102	(57) －	底 4		2.5YR5/1 赤灰		肥前	ロクロ成形　底部糸切 底部目跡４個残	M42
	2	GLU 70-120	包含層	すり鉢 陶器	－ 142	(65) －	底 1	鉄釉	10R5/6 赤		肥前	ロクロ成形 見込み輪状砂目跡 内面マメツ	M41
	3	GLU 70-120	包含層	すり鉢 陶器	－ 164	(46) －	底 5	鉄釉	10YR6/8 赤橙		肥前	敲き成形　胎土練りこみ有 内面マメツ 高台内砂目跡２個残	M38
	4	GLU 70-120	包含層	すり鉢 陶器	320 －	(32) －	口 1	鉄釉	5YR4/1 褐灰		肥前	ロクロ成形 口縁部に鉄釉	M40
	5	GLU 70-120	包含層	すり鉢 陶器	340 －	(89) －	口 1	鉄釉	2.5YR6/4 にぶい橙		不明		M39
	6	GLU 70-120	包含層	鉢 陶器	262 164	128 －	口 1 底 3	鉄泥	10YR8/4 浅黄橙		越前	3足	M35
	7	GLU 70	包含層	甕 陶器	(810) －	(74) －	口 1 以下	鉄泥	5YR6/6 橙		越前		Q18
第12図	1	GLU 70	包含層	土師器 皿 土器	112 内 30	24 －	口 3		5YR8/4 淡橙		在地	灯芯油痕 3/12 以上	Q14
	2	GLU 70-120	包含層	土師器 皿 土器	120 内 60	16 －	口 2		7.5YR7/4 にぶい橙		在地	灯芯油痕 2/12 以上 外面指頭圧痕有	M34
	3	GLU 70-120	包含層	土師器 皿 土器	81 内 39	18 －	口 4		7.5YR7/6 橙		在地	外面指頭圧痕点在	M33
	4	GLU 70-120	包含層	土師器 皿 土器	74 内 44	19 －	口 10		7.5YR8/6 浅黄橙		在地	型打成形 外面掌痕有	M32
	5	GLU 70	包含層	土師器 皿 土器	109 内 58	21 －	口 1 以下		10YR8/3 浅黄橙		不明		Q15
	6	GLU 70	包含層	土師器 皿 土器	158 内 111	31 －	口 2		10YR7/3 にぶい黄橙		在地	ロクロ成形 底部回転ヘラ削り 見込みに凹線１条	Q13
	7	GLU 70-120	包含層	灯明受 皿 土器	(126) 60	23 受径 100	底 4		7.5YR7/4 にぶい橙		在地	内面赤漆 灯芯油痕１ヵ所以上	M31
	8	GLU 70-120	包含層	火消壺 蓋 土器	164 160	25 －	口 1		7.5YR8/3 浅黄橙		在地	外面赤色顔料塗布	M30
	9	GLU 70-120	包含層	火鉢 土器	176 －	(73) 胴 180	口 2		7.5YR8/4 浅黄橙		在地	外面赤漆　口縁部黒漆 外面印花　内面煤付着	M26
	10	GLU 70-120	包含層	焜炉 土器	－ 212	(149) 胴 280	底 1		5YR7/6 橙		在地	窓部分に煤付着 足３個中１個残	M27
	11	GLU 70	包含層	七輪の蓋 土製品	43 36	12 －			2.5Y6/8 橙		在地	七宝と紅葉の刻印	M24
	12	GLU 70	包含層	焼塩壺 土器	38 －	(81) －	口 6		7.5YR8/4 浅黄橙		在地	破損した後被熱か	Q16

第１表　出土遺物観察表

図版番号	番号	調査区	遺構	器種種別	法量 a b	法量 c d	遺存/12	釉薬絵付	胎土色調 外面	胎土色調 内面	産地	備考	実測番号
第12図	13	GLU 70-120	包含層	焼塩壺土器	(40) -	(78) 胴 64	胴 3		10YR8/3 浅黄橙		在地	雲母やや多い	M29
	14	GLU 70-120	包含層	焼塩壺土器	50 -	(92) 胴 76	口 1		5YR7/6 橙		在地	雲母多い	M28
	15	GLU 70	包含層	土錘土製品	27 11	34	完形		2.5YR6/8 橙		在地		M18
	16	GLU 70	包含層	土錘土製品	28 14	51 -	完形		5YR8/3 淡橙		在地		M17
	17	GLU 70	包含層	土人形土製品	82 42	25 -			5YR7/4 にぶい橙		在地	男性立像　中実　型合せ 孔１ヵ所　40g	M21
	18	GLU 70	包含層	土人形土製品	(41) (41)	25 -			10YR8/3 浅黄橙		在地	女性座像　中実　型合せ 穴１ヵ所　22.9g	M20
	19	GLU 70	包含層	土人形土製品	(17) 57	23 -			7.5YR6/4 にぶい橙		在地	台か　中実　型合せ 孔１ヵ所　22.7g	M22

第２表　瓦観察表

図版番号	番号	発掘区	遺構・層位	種別 表面処理	胎土色	釉色 表面色	法量 a 法量 b	法量 c 法量 d	法量 e 法量 f	備　考	実測番号
第9図	4	SLU70	SK03	平瓦 いぶし	N8 灰白	N6 灰	(143) (105)	18 -	- -		M5
	10	GLU140	SD03	平瓦 いぶし	N8 灰白	N5 灰	(101) (56)	22 -	- -		M10
第13図	4	GLU70	包含層	平瓦 いぶし	2.5Y8/1 灰白	N5 灰	(80) (114)	20 -	- -	刻印有	Q29
	5	GLU70-120	包含層	平瓦 いぶし	N6 灰	N3 暗灰	(133) (86)	18 -	- -		M43
第14図	1	GLU70-120	包含層	丸瓦 いぶし	10YR8/1 灰白	10YR2/1 黒	(153) (115)	(27) (29)	- -		M44
	2	GLU70	包含層	軒平瓦 いぶし	N7 灰白	N4 灰	(111) (118)	20 39	- -	文様有	Q30

第３表　石製品観察表

図版番号	番号	発掘区	遺構・層位	種別	最大長 a	最大幅 b	最大厚 c	重量g	色調	備考	実番
第13図	1	GLU 70	包含層	炉石	357	355	(162)	10,130	10YR8/1 灰白	全面ノミ痕	Q31
	2	GLU 70-120	包含層	砥石	(83)	56	6.5	52	10YR7/6 明黄褐		M36
	3	GLU 70	包含層	碁石	22		5.5	4.2	N1.5/0 黒		M25

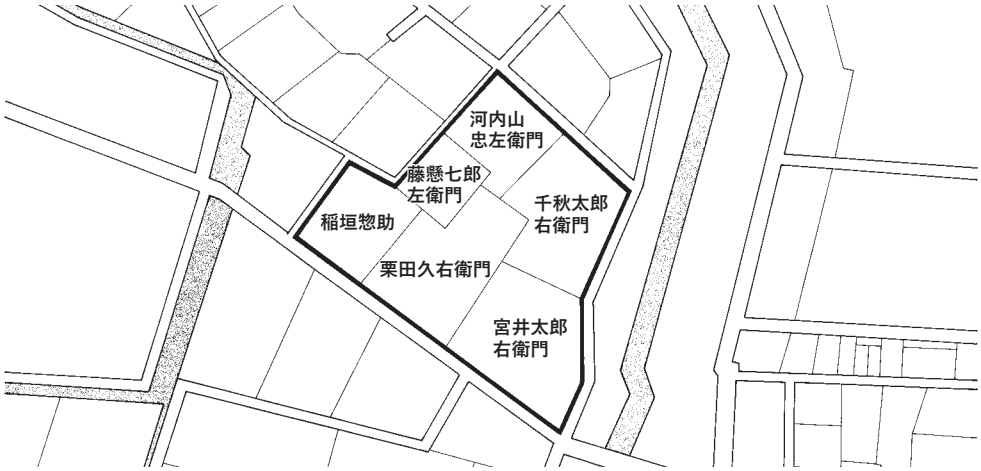
第４表　金属製品観察表

図版番号	番号	調査区	遺構	種別	材質	法量a	法量b	法量c	法量d	法量 e	重量 (g)	備　　考	実測番号
第12図	20	GLU70	包含層	寛永通寶	銅	24.0	24.0	6.0	6.0	1.0	3.13	古寛永	Q20
	21	GLU70	包含層	寛永通寶	銅	25.0	25.0	6.0	6.0	1.0	2.81	新寛永	Q21
	22	GLU70	包含層	寛永通寶	銅	24.0	24.0	6.0	6.0	1.0	2.18	新寛永　全面錆	Q22
	23	GLU70-120	包含層	飾り金具	銅	23.0	23.5	1.0			2.00		M37
	24	GLU70	包含層	煙管吸口	銅	130.0	6.0	11.0			14.74		Q19
	25	GLU70	包含層	包丁	鉄	177.0	55.0	20.0			180.00		Q24
	26	GLU70	包含層	割斧	鉄	119.0	50.0	42.0			1210.00	クサビ残	Q23

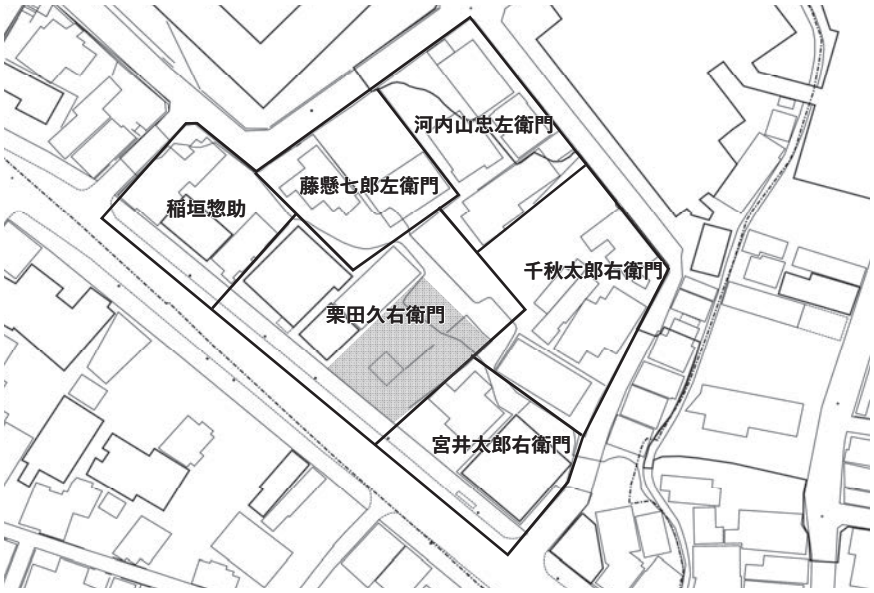
第４章　総括

金沢図（寛文７年）で調査地点をみると、大手町方向から横山町方向に至る道路に接して武家地であることがわかる。道路北には三軒の屋敷地があり、現在の地図と比較すると調査地点は真ん中に位置した屋敷地であった。この屋敷地は栗田久右衛門と記されている。「加能郷土辞彙」によると、二百石取りの御馬廻衆に属する家柄であるが、貞享元年六月十九日に藩の収納米を二重に売買した罪で能登に流罪となった人物で、息子源右衛門が二百石を新たに受け藩臣となったと記されている。

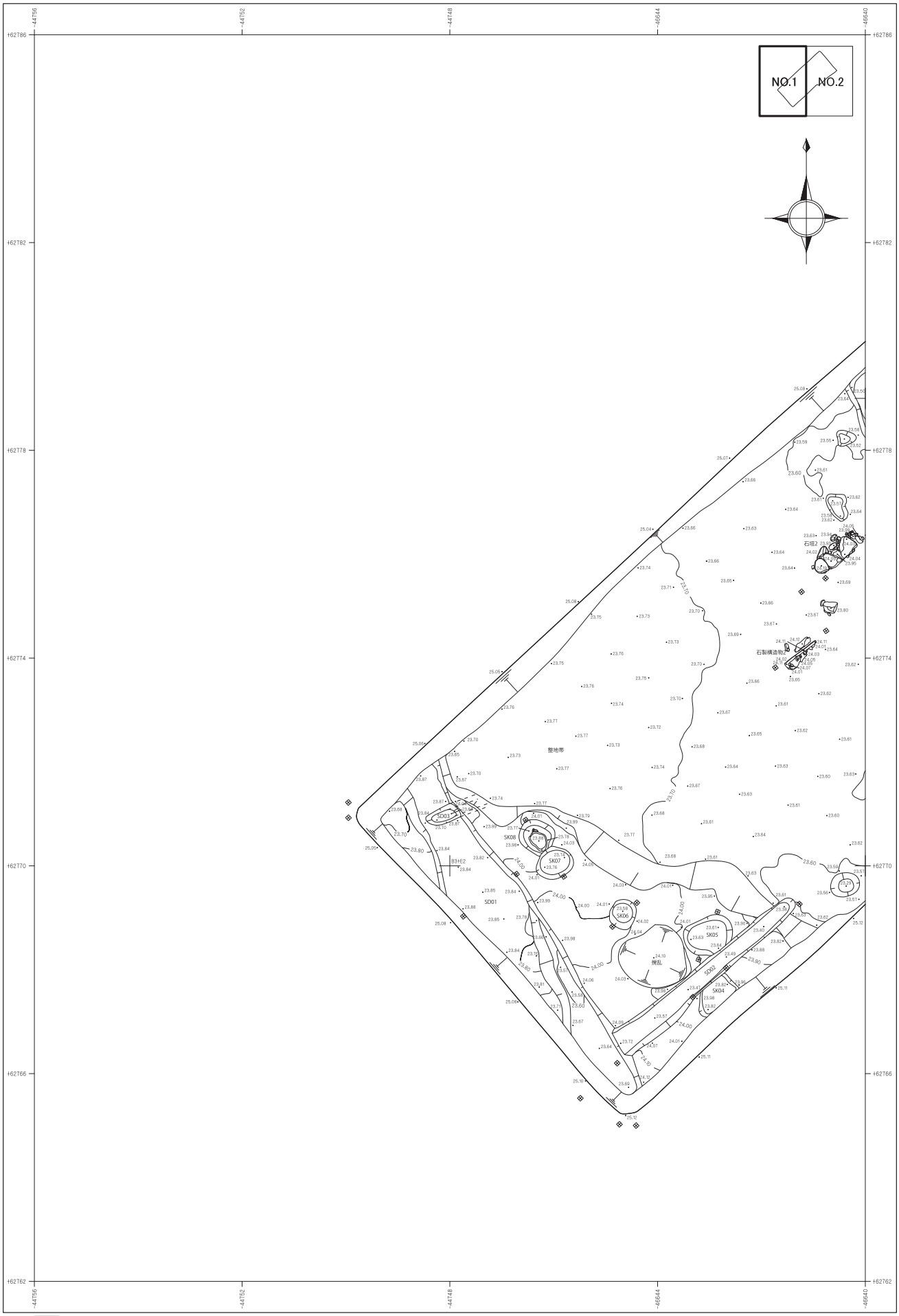
今回の調査では、調査地点の元の地形が、南から北にかけて緩やかに傾斜していた土地であったことが判明した。調査地点の北にある現在の擁壁部分は調査を実施していないが、調査区壁の土層を観察すると南側より北側へ向けて地形が傾斜していることを確認した。傾斜がある土地に江戸時代の屋敷値が設けられていたことになる。建物の痕跡を示すものとして、SK04・SK06・SK08 の柱間距離が等間隔で、SK08 から礎石が見つかっていることからこれらの土坑は柱穴である可能性が高い。この他、石垣や石列は建物の周囲に巡らせたものか、何らかの区画を形成していたものと考えられる。石垣１- １と SK04・SK06・SK08 はほぼ並行する。両者の位置は高低差があり、建物を建てるためには南側の高井部分では石垣等を設けず地表面に直接建築工事を行い、北側では南側の高さに近づけるため土砂による盛土や整地工事を行い、盛土が流出しないよう石垣で土止めしたことが推測される。



第15図　寛文七年金沢図（1667年）よりトレース



第16図　都市計画図と発掘調査区



第17図　金沢城下町遺跡(兼六元町15番地点)遺構平面図　NO.1(S=1/100)

撮影　平成30年　9月　Canon EOS 5DS R
測図　平成31年　2月

座　標　系　第Ⅷ系（測地成果2011）
等高線間隔　10cm

1：100
0　2　4　6m

第18図　金沢城下町遺跡（兼六元町15番地点）遺構平面図　NO. 2（S=1/100）

遺構全体写真〔西から撮影〕

石垣１〔西から撮影〕

石垣１〔北東から撮影〕

石垣２〔北西から撮影〕

石垣２〔南東から撮影〕

石垣１と石列１〔東から撮影〕

石列１〔北東から撮影〕

SK02〔南から撮影〕

SK03〔南東から撮影〕

手前からSK04、SK06、SK07、SK08〔南東から撮影〕

SK08・SK07〔南西から撮影〕

SD01〔北西から撮影〕

SD02〔南西から撮影〕

SD03〔手前　北西から撮影〕

石製構造物１

石製構造物２

第9図－16・17

第9図－19

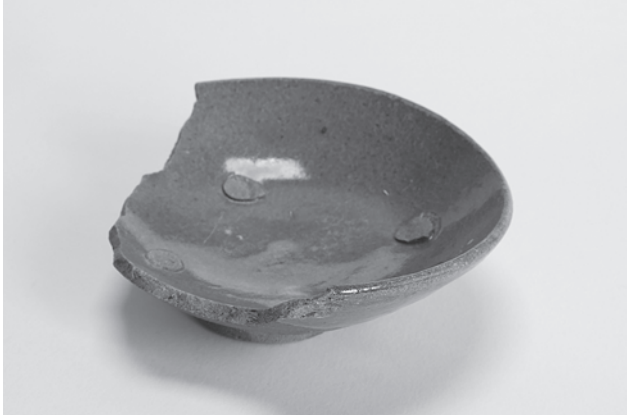
第10図－1

第10図－2

第10図－3

第10図－4

第10図－5



第10図－10

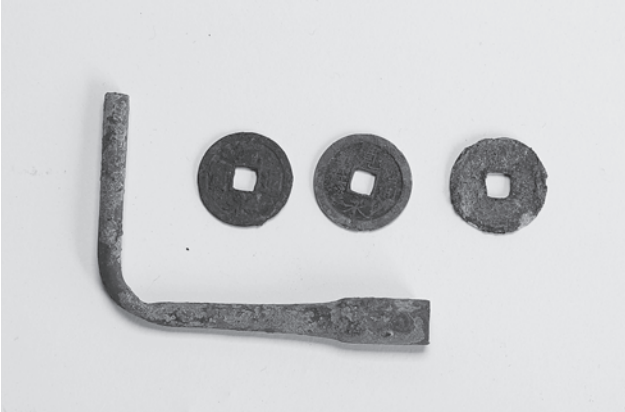
第10図－11

第10図－13

第12図－1～7

第12図－11・17～19、第13図－3

第12図－15・16



第12図－20～22・24

第12図－25・26

第13図－1

報告書抄録

ふりがな	いしかわけんかなざわし　かなざわじょうかまちいせき（けんろくもとまち15ばんちてん） はっくつちょうさほうこくしょ
書名	石川県金沢市　金沢城下町遺跡（兼六元町15番地点）発掘調査報告書
副書名	
シリーズ名	金沢市文化財紀要
シリーズ番号	３２７
編著者名	新出敬子
編集機関	金沢市埋蔵文化財センター
所在地	〒920-0374　金沢市上安原南60番地
発行年月日	西暦2020年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
金沢城下町遺跡 （兼六元町15番地点）	石川県 金沢市 兼六元町 19番1、20番、 21番1、21番3、 22番1	72014	－	36° 33′ 57″	136° 40′ 00″	2018.7.13 ～ 2018.9.27	202㎡	有料老人ホーム 新築工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
金沢城下町遺跡 （兼六元町15番地点）	城下町	江戸時代	石組、土坑、溝	近世陶磁器、近世土師器、 近世瓦、金属製品、 石製品、土製品	

要約	調査地は、金沢城の東側で城に近い武家地に位置する。遺跡からは、区画を形成していたと考えられる石垣や石列が検出された。また、建物の柱穴と考えられる土坑も確認された。

石川県 金沢市

金沢城下町遺跡（兼六元町15番地点）

発掘調査報告書

（『金沢市文化財紀要』327）

令和２年（2020）3月31日発行

発行　金沢市

編集　金沢市埋蔵文化財センター

〒920-0374

石川県金沢市上安原南60番地

TEL（076）269-2451

印刷　和巧フォームズ株式会社

〒921-8147

石川県金沢市大額２丁目67番地

TEL（076）296-8050